

「だが、マスロボーエフさん、どうです、御一緒に半ダースばかりひっかけようぢやありませんか。」

「いや、君、今はいけないよ。」とマスロボーエフは答へた。「少し用事があるからな。」

「ヒ、ヒ、ヒ」私にも仕事がありますよ。あなたに構つては……」

連は彼をまた肘で突いた。

「後にしろ、後にしろ！」

マスロボーエフは強ひて彼等を見まいとしてみるかのやうであつた。が、私達は最初の室に入つた。其處には室中に可なり綺麗な物置臺が續いてゐて、その上には口取や、焼パンや、銀頭や、それからいろんな色の酒の入つた壺があつた。其處へ入るとすぐにマスロボーエフは素早く私を隅の方へ連れて行つて、斯う言つた。

「若いのは、ありや商人の息子で、シゾブリューホフと云ふ男だよ。有名な穀物商の息子だが、父の遺産を五十萬ルーブリほど買つて、今それを蕩盡してゐるのさ。巴里へ行つて、彼處でいろんなことに散財したことがある。大方彼方ですつかり使ひ果してしまつたらしい。だが、また叔父からも遺産を受けて、巴里から歸つて来たのさ。そして此處で残りの金も直き使ひ果すだらうよ。一年も経てば彼奴乾度浮浪漢になるに決つてる。雁のやうに馬鹿な奴さ——第一流の料理屋だの、地下室だの、酒場だの、女優だの、龍騎兵だのに志願してよ——つい近頃願書を出したばかりだ。もう一人の年寄つた方はアルヒーホフと云ふ男で、矢張り商人か、それとも支配人か何かしてる男で、買出しに歩き廻つてるのだ。ろくでなしで、悪漢で、シゾブリューホフの友達だ。ユダヤワルスタフのやうな奴だ。二重の破産者で、謂はゞいろんな模様のついた悪い毒を盛つた、生きた器物さ。それで、或る刑事上の事件に觸れたこともあるが、巧く逃げおぼせたよ。俺はもう久しいことアルヒーホフに眼星をつけてゐる。立派な胸衣を着けた若者のミトローシユカも矢張り彼奴を憎んでゐる。彼奴

は人の見てゐる前で紙幣を贋造して、大膽にもそれを兩換してゐるよ。そしては金持の伯爵の風を装うて、いろんな悪いことをして歩くのだ。だからミトローシユカはひどく彼奴を憎く思つてるんだ。それにアルヒーホフはミトローシユカから、その舊友のシゾブリューホフを奪つたんだから尙堪らないや。ところで、あの二人が今この料理店で落ち合つたとしたら、何か彼等の間に陰謀がたくらまれたに違ひないさ。僕にはそれが分つてる。ミトローシユカはアルヒーホフとシゾブリューホフの間に此處でどんな思はしいことが企らまれたか、それを僕に話すだらう。僕はアルヒーホフに對するミトローシユカの遺恨を利用しようと思ふんだ。それには僕の方に或る目的があるんだよ。僕が此家へやつて来るのもそれがためさ。だが、僕はミトローシユカに事實を打明けけるのを好まない。君も彼の方を見ないやうにしてゐ給へ。此家を出る時、彼は乾度自分で僕のところへ来て、一伍一什を話すだらう……では、ワーニヤ君——あの室へ行かう。おい、ステパン！」とマスロボーエフは掃除人に向つて、「俺の註文は分つてるだらうね？」

「へー、分つてゐやすとも。」

「出来るかね？」

「へー、出来やすとも。」

「では、持つておいで！ まあ坐り給へ、ワーニヤ君！ どうして君はそんなに僕の方を見てるんだ？ 吃驚したかね？ さう吃驚しなくてもいいよ。人間にはどんなことがあるか分らないものだ。夢にすら見たことのないことが起るからね。だが、ワーニヤ君！ たゞこれだけは信じてくれ給へ。このマスロボーエフはたとへどんなに迷つても心だけは矢張り持つてるよ。ただ境遇が變つただけなんだ。これでも僕はドクトルにも推薦されたし、國文學の講師にもなりかけたし、ゴーゴリに關する評論も書いたことがあるよ。また嶺山師になら

うとしたこともあるし、雑談もついたことがあるよ。女の方でもちゃんと承諾してゐたのだ。が、態々式を擧げようとする間際になつて、女が裏切つて或る教師のところへ嫁いでしまつたのさ。その頃僕は或る事務所に——商館ではないが——勤めてゐたのだが、餘り思はしくなかつたので二三年もするとやめてしまつた。併しお金を貯めるのには今の方が結局都合が好いよ。つまり賄賂を取つてゐるのさ。仔羊を牝羊に、牝を仔羊にけしかけて、その中に立つてうまい汁を吸つてゐるのさ。軍人はかりの戰場ぢやないからね。蔭に廻ると大分いゝんな祕密が潜んでゐるからね。それを嗅ぎつけるのが僕の職業さ……わかつたかね？」

「では、君は何か探偵でもしてるのか？」

「さうぢやないよ。探偵ぢやないが兎に角或る仕事に従事してるさ。一部は官の、一部は私の仕事だ。まあワニーヤ君！ ウォーソツカでも飲まうよ。僕はまだ自分の智慧までは飲み盡さないから、自分の未来がどうだぐらゐは分つてるよ。僕の時代はもう過ぎたのだ。もうどうしたつて取り返しはつかないのだ。たゞ一つ言つておくがね、ワニーヤ君！ 君が若し僕の呼び聲に應へなかつたら、僕は今日も君の傍に寄らなかつたかも知れないよ。君の言ふ通り、僕はこれまでも度々君の姿を認めて、その度に近寄らうとしたのだが、まあ……と思つては止した。僕は到底君の友たる資格がないよ。君はよく言つてくれた。若し僕が君に近寄つたら、それは酔つぱらつたせゐだと思つてくれ給へ。餘りくだらないことを喋つたが、もう僕のことには止めにして、今度は君のことを話さう。僕は君、讀んだま。大いに讀んだよ、僕は今君の處女作のことを言つてるんだ。あれを讀んで僕は殆んど眞人間になつたやうな心持がしたよ。少くとも眞人間になりたいと思つたよ。まあかうなんだ……」

マスロボーエフはまだいろ／＼と私に話した。彼はだん／＼酔ひの廻るに連れて大分優しくなつて、涙まで

落した。マスロボーエフは若い時分は偉い少年で、いつも大きなことを考へてゐた。まだ小學校時代から奸智に長けた狡助であつたが、本心は矢張り情に富んだ男であつた。が、今では全く滅びた人である。かういふ種類の人間はロシア人の間に澤山ある。彼等は往々偉い才能を持つてはゐるが、それが彼等に於てはひどくこんがらがつてゐる。それに彼等は意志の薄弱なところから、悪いとは知りながら自分の良心に逆らつてゐる。現に滅亡の淵に沈んで行くのを自分で意識しながらするべつたり沈んで行くのだ。マスロボーエフは、そのうちにすつかり酔ひどれてしまつた。

「君！ もう一言云ふことがある。」と彼は續けた。「僕は最初君の名聲の高いのを聞いて、それから君に關するいろんな評論を讀んだ。(實際讀んだよ、君は僕が何も讀んでゐないと思ふか知れないけれど。)それから僕は上靴もなしに泥だらけの悪い長靴を穿いてぼろ／＼に破れた帽子を被つて、君に出會したことがある。君も何か思ひ當ることがあるだらう。で、君は今でも雑誌に働いてゐるのかね。」

「うん。」

「郵便馬車と同じやうなものだね？」

「まあそんなものだ。」

「それならそれでいゝさ。まあ飲むがいゝや。僕はいつも飲むだけ飲んで、自分の長椅子——僕のところにはパネのついた素敵な長椅子があるよ——その長椅子に寝ころんで、こんなことを考へてるんだ。——僕はホーマーだ、僕はダンテだ、でなければフリードリヒ・バルバルウサだと、さういつたやうなことをさ。それから自分に想像出来るだけのことを考へる。ところで、君は自分をダンテだの、フリードリヒ・バルバルウサだのと想像することは出来まい。第一、君は君自身でありたいと願つてゐる。それから君には凡ゆる欲求が禁止さ

れてゐる。君は畢竟郵便馬車だ。僕には想像力があり、君には現實がある。まあ胸襟を開いて語り給へ。どうだね、お金は要らないかね。さう顔を曇らなくてもいいよ。お金を取つて、債主の拂ひを済ましてそれから自分の一生を樂にするのさ。そして好きなことを考へて、偉大な作品を書くのだ！ どうだ、言ふことがあるかね？」

「まあ聞き給へ、マスロボーエフ君！ 君の親切な勸告に對しては大いに敬意を表するよ。だが、今は何も答へることが出来ない、話が長くなるから。いろんな事情が纏綿してゐるからね。だが、後で乾度打明けて君に話すよ。君の勸告に對しては感謝に堪へない。何れこれからは君のところへ時々行くよ。是非君の助言をかりなければならぬ事件があるのだ。君はこの種の事件に就いては巧者だからね。で、その事件といふのは大體かうなんだ。」

私はスミット老人とその孫娘のことを、例の珈琲店の一件から始めて残らず物語つた。すると不思議なことには、私が話してゐるうちにマスロボーエフの眼は妙に輝いて、彼がこの事件に就いて何か知つてゐるやうに思はれた。で、私はこの事に就いて彼に訊いた。

「いや、さういふ譯ぢやない。」と彼は答へた。「たゞ、スミットのことには、彼が珈琲店で死んだといふことだけを聞いてゐる。だが、ブローノワ夫人のことなら、僕は實際何かしら知つてゐる。僕は二ヶ月ばかり前にこの夫人から賄賂を取つたことがある。けれども、僕は彼女から百ルーブリを強奪したとはいふものゝ、兎に角その時僕は百ルーブリのために彼女を縛るんぢやなく、五百ルーブリのために縛るんだと自分に誓つたのだ。厭な女さ。随分けしからぬことをやつてるんだ。何でもないことだけれど、時としては随分悪いことになる。僕はドン・キホーテぢやないが、時々えらいことに遭遇すよ。三十分前にシゾプリーエーホフに出會した

時、僕は大いに喜んだ。彼を此處へ引張つて来たのはアルヒーポフだ。僕はアルヒーポフがどんなことを企んでゐるかそれを知つてゐるから、大抵分つてる——だが、それは秘しておかう。僕は君からあの娘のことを聞いたので何より嬉しい。それがために僕は思ひ當る節が多い。僕はいろんな人から委託を受けるので、妙な人達と知合になつてるよ。近頃僕は或る侯爵に頼まれて、或る事件を捜査したことがある。それが君、侯爵ともあらう者にこんなことがあるかと驚かれるやうな事件なんだ。それを君に話してやらう。でなければ、別な有夫姦の事件を話してやらう。そのうち僕のところに来給へ。かういふ種類の材料ならいくらでも提供しよう。まあ試みに書いて見給へ……」

「して、その侯爵の苗字は何と云ふのかね？」と私は何となく心當りがあるやうな氣がするので訊いた。

「だか、君に何の必要がある？ そりや、ワルコフスキさ。」

「ビョートルかね。」

「さうだよ、君は知つてるのか？」

「知つてるよ。だが、さう深くは知らない。では、マスロボーエフ君、僕はその人のことでこれから度々君のところを訪ねるよ。」と、私は立上つて言つた。「君の話は非常に面白かつたよ。」

「さうか、君が來たいなら幾度でも來給へ。話なら出来るよ。だが、それは或る點までだよ——いゝかね！ それでないと、信用と名譽——つまり職務上の信用といったやうなものを失つてしまふからね。」

「さうさ、信用の許す範囲内です。」

私は何だか胸騒ぎがした。彼はそれに氣がついた。

「して、君は僕が今話した事件に就いてはどう思ふかね。君は何か思ひ當ることがあるかな。それともないか

な？」

「君の話した事件？ まあ、ちよつと待ち給へ。僕は勘定を済ますから。」
彼は食料室へ行つた。そして其處でミトロシユカと呼び棄てにしてゐる、例の胸着を着た若者と不意に出會した。マスロボーエフは彼が私に言つたよりも、もつとその青年とは親しいやうに見えた。少くとも彼等は今始めて會つたのではないといふ事だけは確かであつた。ミトロシユカといふ男は頗る奇抜な風をした若者であつた。その胸着、その絹の赤襦袢、その際立つた、併し品の好い輪郭の顔、その元氣のある、輝かしい眼付、その若々しい淺黒い色、それ等が物好きな、避け難い印象を與へた。彼の身振りは何となく際立つて元氣があつた。それと同時に彼はその時どうかして自身をさも事務家らしく、堅實さうに見せようとして、自分を抑制してゐるやうに見えた。

「それぢやね、ワリーニヤ君。」とマスロボーエフは私の方へ戻つて来て言つた。「君、今晚の七時ごろ僕のところへ來給へ。さうすれば僕は君にいろ／＼話すから。僕は君、獨身者で、何もしてゐないよ。以前にはやつてゐたが今はたゞ酒を飲むだけで、仕事から遠ざかつてしまつた。だが、僕のところには以前の關係が残つてゐる。何事でも穿鑿することが出来るよ。いろんな上流の人達のことと嗅ぎつけることが出来る。さういふことなら出来る。實際閑暇な時、つまりしらふの時は自分でも何かしらやつてゐるよ。矢張り知人のお蔭でね……それが多く探偵だ……いや、こりや危なく言つてしまふところだつた！ もう澤山だ……これが僕の住所だよ。セステラウオチナヤ街にゐるんだ。僕はもうすつかり酔つぱらつてしまつたよ。黄金酒でももつとひつかけて、家へ歸つて寝るとしよう。來給へ、アレキサンドラを紹介するから。そして時があれば文學のことも話さうぢやないか。」

「よからう、だがあのことは？」

「うん、勿論あのことも話すよ。」

「ぢや行くかも知れないよ、屹度行くよ……」

六

アンナ・アンドレーウナは疾うから私を待ち焦れてゐた。私が昨日ナターシヤの手紙のことを話したのが彼女の好奇心を強く惹きつけた。そして彼女は朝非常に早くから、少くも十時頃から私を待ち侘びてゐた。私が午後の二時頃彼女のところへ行つた時には、不幸な老婆は待つて／＼待ちあぐんでゐるところであつた。それに彼女は昨日から彼女の心に蘇つてきた自分の新しい希望のことや、イフメニエフが昨日から病氣になつて鬱いでゐることや、それにも拘らず何故か彼女に優しくするといふことなどを、私に話したくてならなかつたのだ。私が行くと、彼女は不満さうに冷やかに顔を曇めて私を迎へた。そしてぶつ／＼言つて少しも聞きなうな風を見せなかつた。それどころか「何のために來なかつた？ あなたは毎日のやうに何處をぶらついてゐるんです」と言はんばかりの顔付をしてゐた。彼女は私が遅く來たのを怒つてゐたのだ。が私は急いでゐたので、餘計なことは抜きにして、彼女に昨日ナターシヤの許に起つたことを洩れなく話した。老婆の訪問の事と、彼の悦ばしい申出の事を聞くと、老婆の悲しみはすぐにすつかり消えてしまつた。彼女がどんなに喜んだかは言ひ現はす言葉もない。彼女はまるで正體を失つて、十字を切つて、泣きながら聖像の前に打伏したり、私を抱いたりして、それからすぐイフメニエフのところへ駈けて行つて、彼に自分の喜びを話さうとした。

「ねえ、ワーニヤさん、あの人はいつもいろんな虚げや屑しめに悲しんでるますが、今ナターシヤがすっかり満足を得たと聞いたらすぐ何もかも忘れてしまひませう。」

私はやつと彼女を止めた。人の善い老婆はもう二十五年も夫と生活しながら、まだ彼をよく知らなかつたのだ。彼女は今すぐ私と一緒にナターシヤのところへ行きたがつた。私はイフメニエフ老人が大方彼女の行爲に賛成しないのみか、却つてこれがために事を壊すやうなことになるはしないかといふことを老婆に説いた。でやつと彼女は思ひ止まつた。が、私をまだ半時も引止めて、その間自分一人で話しつゞけた。「誰が今私のところにあるのですか？」と彼女は言った。「こんな嬉しいことがあるのに、たつた一人つきりでも、勝手にした室にさ！」が、私は今ナターシヤが私を待ち悶えてゐるからと云つて、たうとう私を放してくれるやうに彼女を宥めた。老婆は出る時私に幾度か十字を切つて、ナターシヤへ特別の祝福を傳へてくれと言つた。そして若しナターシヤに大したことがなかつたら今夜もう一度来てくれと言つたのを私がきつぱりと断つた時、彼女は泣き出さんばかりであつた。今度は私はイフメニエフ老人には會はなかつた。彼は一晩中眠らずに、頭痛や熱で呻き通したさうだが、その時は自分の書齋に寝てゐたのであつた。

ナターシヤも矢張り朝のうちから私を待ち通してゐた。私が入つた時、彼女はいつものやうに手を組んで何か思ひに沈みながら家の中を歩いてゐた。今では私は彼女のことを追憶する時は、彼女がみすばらしい室にただ一人取残されて、両手を組んだまゝ伏目になつて、思ひに沈みながら、待ち焦れながら、あてもなく彼方此方と歩いてゐる彼女より他には思ひ浮ばないのである。

彼女は靜かにそのまゝ歩きつゞけながら、私にどうしてそんなに遅く来たかと訊いた。私は簡単に私の歩き廻つたことを話したが彼女はでんで耳に入れなかつた。彼女は何か非常に心配してゐるらしかつた。で、「何か

變つたことがありますか？」と私は訊いた。「變つたことは何もありません」と彼女は答へたが、彼女の様子を見て私はすぐに彼女に何か變つたことが出来て、彼女はそれを私に話すために私を待つてゐたのだといふことがわかつた。しかし彼女はいつもすぐには話さずに、私が立ち去る間際になつて話すのが例であつた。私にはいつもさうであつた。で私は彼女に合鍵を打ちながら待つてゐた。

私達は勿論昨日の話を始めた。老侯爵に就いての私達の印象が、私と彼女とすつかり一致してゐることに私は驚いた。彼女は彼を好かなかつた。昨日よりも一層好かなかつた。そして私達が彼の昨日の訪問をすつかり細々批評した時ナターシヤは突然かう言つた。

「ただどねワーニヤさん、たとへはじめに好かなくとも、それはその人が後で好かれる徴候だと云ふことはよくありがちなことでせう！ まあ少くとも、私にだけはさうでしたよ。」

「さうならいゝですがねナターシヤさん、それに私の窮極の考へはかうです。つまり侯爵は猫を被つてをるかもしれないが、兎に角あなたの方の結婚には、ほんとに眞面目に賛成してゐるのだと私は考へるのです。」

ナターシヤは室の中央に立止まつて荒々しく私を見た。彼女の顔はまるで變つてしまつた。唇までがやゝ慄へてゐた。

「ですけど、いくらあの人だつて、こんな場合に猫を被つて嘘なんか言へますでせうか？」と彼女は傲慢な疑ひを抱いて聞いた。

「それはさうです、それはさうです。」と私は早口に合鍵を打つた。「無論嘘なんか言ふものですか。私はそんなことを思ふ必要もないと思ひますわ。それに狡猾だと云ふほどの口實さへ見出すことも出来ないではありませんか。それだのにあの人には私をそんなに嘲笑ふやうなとこ

ろがあつたのでせうか？ 誰がそんな恥辱を忍ばれませう？」

「勿論です、勿論です。」と私は答へたが、心の中ではかう思つた。「あなたは今室の中を歩きながら多分そのことを考へてゐたでせうが、ひよつとしたら私よりもつと疑つてゐるのかも知れませんか。」

「私はどうかあの人が早く歸つてくれ、ばい」と思つてゐますよ。」と彼女は言つた。「あの時は一晩中私のところゐたいやうな様子でしたわね……何もかもうつちやつて出掛けたくらゐですから大方重大な用事でせうが、あなた知りませんか、ワーニヤさん？ 何か聞きませんでしたか？」

「知りません。あの人はいつも金儲けばかりしてゐるのです。このペテルブルグで何かの請負をやつてゐると聞きました。ナターシヤさん、私達はそのことは何も考へますまい。」

「勿論考へますまい。アリョーシヤは昨日何か手紙のことを言つてゐましたよ。」

「何かの報知でせう。だが、アリョーシヤは來ましたか？」

「來ましたよ。」

「朝早くですか。」

「十二時頃でした。あの人は朝寝坊ですからね。一寸坐つてゐましたが、私はあの人を逐ひ出すやうにカーチヤのところへやりましたよ。いけないでせうか、ワーニヤさん？」

「では、彼は自分で其處へ行かうとはしなかつたのですか？」

「いえ、自分でも行かうとしたんですよ……」

彼女はまた何か言はうとしたが、黙つてしまつた。私は彼女を見ながら待つてゐた。彼女の顔は悲しさうであつた。私は彼女に尋ねようとしたが、彼女は時として非常に質問を厭がることがあるので止めた。

「あの人はほんとに變な人ですよ。」と彼女はやゝ口を歪めながら、さも私を見まいとするものゝやうに言つた。

「だが、なんですか、あなたのところに何かあつたんですか？」

「いえ、なんにも、たゞね……あの人は優しい人ですけど…… たゞあの……」

「もう彼の悲しみや心配はおしまひになつたのです。」と私は言つた。

「ナターシヤはちつと探るやうな限付で私を見た。彼女は大方私にから答へたかつたのだ。『以前からあの人のところには悲しみや心配は僅かしかありませんでした。』しかし、私の言葉にも同じやうな思ひがあると思つた。彼女は不満らしかつた。」

が、すぐにまた愛想よく、優しくなつた。一體に今度は彼女は非常に温順しかつた。私は彼女のところに一時間ばかりゐた。彼女は非常に心を亂してゐた。候爵の來訪が彼女を驚かしたので、私は彼女の或る問ひに依つて、彼女が昨日彼にどんな印象を與へたかと云ふことを知りたいやうな様子を認めた。彼女は態度を亂さなかつたらうか？ 彼女は候爵の前に自分の喜びを餘り言ひ過ぎはしなかつたらうか？ 餘りに怒りやばくはなかつたらうか？ それとも反對に餘りに謙遜に過ぎはしなかつたらうか？ 彼は何とも思ひはしなかつたらうか？ 笑ひはしなかつたらうか？ 彼女を蔑すむやうな心は起さなかつたらうか？……こんな考へからして彼女の頬は火のやうに眞赤になつた。

「悪い人が何と思つたつてそんなに心を亂す必要はないでせう。勝手に思はせるがいゝんです！」と私は言つた。

「どうしてあの人が悪人なの？」と彼女は訊いた。

ナターシャは疑ひ深かつたが、心は純潔で率直であつた。彼女の疑ひ深いのは純潔な泉から發するのであつた。彼女は高慢で、氣位が高かつた。若し彼女が何よりも高く思つてゐるものが、嘲笑を浴びせられるやうなことがあつたら、彼女は黙つて忍ぶことが出来なかつた。彼女は下劣な人間の輕蔑には、勿論たと輕蔑だけを以て酬いた。が、彼女が神聖だと思つてゐるものを、たとへ何人が笑つたにせよ、その嘲笑に對しては兎に角心を痛めるのであつた。これは意氣地がないからではなかつた。一つには餘りに世間も知らず人にも馴れないで、自分の室にばかり閉ぢ籠つてゐた。彼女は生涯自分の室から出すに、閉ぢ籠つてばかりゐた。それから善良な人々にはよくある性質だが、一旦人を捕へると、彼を實際よりもよく考へて、その人のあらゆる善良な方面を誇張する性質が彼女には極端に發達してゐた。それは恐らく父から受け繼いだものであらう。かういふ人々に取つては、後で失望するのが何より苦しいものである。殊に自分の過失だと悟つた時に最も苦しい。何ゆゑ實際以上の價値を豫期したのか？　かういふ失望があゝいふ人達をいつも惱ましてゐる。彼等はちつと自分の室に閉ぢ籠つて、世間に出ない方が遙かにましである。彼等は實際また自分の室を愛して、その中に燻ぶつてゐる。しかしナターシャは多くの不幸と多くの侮辱とを受けた。彼女は既に病的な人間であつた。たとへ、私の言葉に譴責の意味があつても彼女を罪することが出来ない。

が、私は急いで立ち上つた。彼女は驚いた。私が坐つてゐるうちは少しの優しさも見せないで、却つて私にはいつもより冷かであつたのに、私が掛掛けようとすると、彼女は殆んど泣き出さんばかりであつた。彼女は熱く私を接吻した。そしてなぜか私の目に暫くの間ちつと見入つてゐた。

「あのね、ワニーヤさん。」と彼女はいつた。「アリョーシヤは今日はほんとにをかしかつたですよ。私は吃驚しましたわ。あの人はごく優しく、ごく嬉しさうでしたの。さうして、蝶々のやうに鏡の前をぐるぐると廻つたり

しましたの。この頃あの人はなんだか無遠慮になりましたよ。……さう長くは坐つてゐませんでした。そしてどうでせう、私にお菓子を持つて來たんですよ。」

「お菓子を？」さうですか、それはまた馬鹿に優しいですな。そして無邪氣ですな。ほんとにあなた方二人は何といふ人達でせう！　だのに、この頃はお互に探り合つたり、お互の顔を見交はせて秘密な思ひを顔色で讀まうとしたりするやうになりましたね。（だが、あなた方は顔色ではなんにもわからないでせう。）また彼はなんでもありません。彼に快活な、以前の通りの小學生です。だが、あなたはどうでせう！」

ナターシャはアリョーシヤを訴へる時とが、何かをかしな疑問を解決するときとか、何かの秘密を持つて來て私に解かせようとするときとか、そんなときにはいつも言葉の調子を變へて私の傍へ近づいた。そんなときは彼女はいつも笑ひながら私の方を見るのであつた。そして自分がすぐ安心出来るやうに、その事を解決してくれと私に願つてをるかやうであつた。そんな場合には私はいつも誰かを叱責するやうな馬鹿らしい、素氣ない調子に出た。それが私に於ては全く不意に、自然に出るのであるが、それでいつも成功した。私の鹿爪らしい素氣ない顔付が丁度その場合によく當て嵌まつて、いかにも權威を持つてゐるやうに見えた。時として人は誰か彼を叱責してくれ、ばい、といふやうな強い要求を感じることがある。少くともナターシャは私の鹿爪らしい調子から全く慰藉されるやうなことがあつた。

「いえ、ワニーヤさん。」と彼女は片手を私の肩にかけ、片手で私の手を握つたまゝ自分の眼で私の眼を讀まうとしながら言ひつづけた。

「私にはあの人がなんだか浮つ調子のやうに思はれます！……丁度十年も添うた夫のやうに、それでゐてまだ細君に甘い人のやうに思はれますの……まだ早過ぎるぢやありませんか……あの人は笑つたり、ぐるぐると廻つ

たりしてゐましたが、それも以前のやうに私の心を惹きませんでした……カーチャのところへ非常に急いで来ました。私が話しかけてもあの人は耳にも入れないで、他のことを話したんですよ。それがあの厭な社交界の習慣なのです。それを私達はその人に止めさせたのですが。一口で言へば何だか……冷かなやうでしたわ。私はどうしたらいいんでせう。たうとうこんな風になつてしまひました。ワーニヤさん、私達はなんといふ片意地な暴君でせうね。今になつてやつとわかりましたよ。人が顔色を變へると云ふことはたゞごとではありません。なぜあの人は顔色を變へたんですかわかりません。ワーニヤさん、あなたがたど今私を責めたのはもつともですわ。それは全く私一人の過失です。自分で作つた苦しみです。ワーニヤさん、私あなたにお禮を申しますわ。あなたは私をすつかり慰めてくれました。あの人が今日來たらなんと言ふでせう。乾度まださつきのことで怒つてゐるでせう。」

「では、あなた方は喧嘩でもしたのですか。」と私は吃驚して叫んだ。

「そんなことはありませんでした。たゞ私は少し鬱いでゐました。すると、あの人ははしやいでゐたのが、急に萎れてしまつて、素氣なく私と別れました。それで私は、あの人の後から使ひをやりました……あなたも今日お出で下さいね、ワーニヤさん。」

「なにか事故さへなければ乾度來ます。」

「では、彼處になにか事故があるんですか？」

「よんどころないことがあります。ですが多分來られませう。」

丁度晩の七時頃私はマスロボーエフのところへ行つた。彼はセスチラウオチナヤ街のとある小さな家の側家に住んでゐた。室は三間あつて可なりむさくるしい住居ではあつたが豊かに飾りつけられてあつた。幾分か裕福さうではあつたが、同時に非常な貧乏らしくも見えた。年は十九ぐらゐの素敵に美しい娘が私に入口を開けてくれた。服装はひどくあつさりとしてゐたが、いかにも優しく小ざつぱりと着こなしてゐてごく人の善ささうな、快活な服付をしてゐた。私はすぐにこれが先刻マスロボーエフが紹介すると仄めかした例のアレキサンドラといふ女だと感づいた。彼女は私に誰方ですと尋ねて、私の姓を聞くとすぐ、マスロボーエフは今まで私を待つてゐたが、今自分の室でやすんでゐると言つて、私をその室へ案内した。マスロボーエフは立派な、ふつくりした柔かさうな長椅子の上に、自分の汚ない外套を引つ被つて、皮製の擦れ切つた枕をして寝てゐた。彼は寢耳がごく鋭敏だつた。私達が入つて行くときすぐ彼は私の名を呼んだ。

「やあ！ 君か！ 待つてたよ。今君が來て僕を起して夢を見てゐたのさ。丁度時刻だ。さあ、出掛けよう。」

「何處へ出掛けるんだ。」

「夫人、どこへさ。」

「どんな夫人のところへ？ 何しに？」

「ゾブーノワ夫人のところへさ。彼女と勘定を済ますためだ——だが、これは素敵な美人だらう！」と彼はアレ

キサンドラの方を向いて言った。そしてブリーノワ夫人のことを思ひ出して、彼女の指先に接吻した。

「まあ、いやですよ、そんなことを仰言つて！」とアレキサンドラはこの場合すこしばかりぶり／＼腹を立てるのが當然だと思つて言った。

「まだ知らなかつたのだな？ さあ、お知己にしよう。アレキサンドラ！ そら此方は文壇の大將だよ。かうしてこの先生達にたゞで會ふのは一年に一度ぐらゐるものだよ。そのほかの時はお金のために忙しいのだ。」

「馬鹿なことを仰言つては困りますよ。どうぞ、あなたはあの人の言ふことをお耳に入れないで下さい。いつも私の事を笑つてばかりゐるんですよ。大將とは一體何ですの？」

「俺はお前に彼等が特殊な人達であると言つてゐるのだよ。だが君、閣下！ 僕等を馬鹿者だと思はないでくれ給へ。僕等だつて見掛けよりは遙かに精巧だよ。」

「あの人の言ふことなんかお耳に入れないで下さい！ 温順しい方々をいつも怒らしてばかりゐるんですよ。面の皮の厚い男ですよ！ せめて芝居にでも連れて行つたことでもあればですがね！」

「アレキサンドラ！ お前は自分の家の人を可愛がらなくちやいけないよ……可愛がらなくちやいけないと言ふことを忘れたかね？ あの言葉を忘れてしまつたのかね？ そら俺が教へた言葉をさ！」

「誰が忘れるのですか。あんな、まるで謔言みたいなことを。」

「ぢや、どんな言葉だね！」

「お客さんの前で言ふのは恥を掻きまゝよ。そりや厭みつたらしい言葉なんですもの。舌の根が濡れても言ひませんよ。」

「ぢや忘れたんだな！」

「忘れるのですか！ ベナアツ（氏神のこと、神用の意味を指す） つていふんでせう！ 自分のベナアツを愛しなさいだつて……何といふ下らないことでせう！ ベナアツも何もあつたのですか。何だつてそんなものを愛するんです！ 嘘ばかり言つて！」

「その代りブリーノワ夫人のところには……」

「ええ、あなたはブリーノワさんと一緒にいらつしやる方がいゝんですよ……」

かう言つてアレキサンドラはぶん／＼しながら屋外へ駆け出してしまつた。

「もう時刻だ！ 出掛けよう！ さやうなら、アレキサンドラさん！」

二人は屋外へ出た。

「君、ワーニヤ君、先づこの辻馬車へ乗るとしようよ。あ、さう／＼僕は今朝君と別れてからもつと別なことを聞いたよ。臆測でなしに確かなことを聞いたよ。僕はあれからワシリエフスキ島にまだ一時ばかり残つてゐたのだ。あのアルヒーポフといふ奴は恐ろしい穢はしい、厭な奴で、いろんな下らない洒落や下劣な趣味を持つた男だ。あのブリーノワといふ女も疾うから似たり寄つたりの悪事を働いてゐるので有名なんだ。彼女はこの間も一人の名家の娘をひどい目に遭はせたのさ。彼女が今朝君の話したあの孤兒の娘に着せたといふ細木綿の衣服がどうも怪しいのだ。なぜつて僕はその衣服に就いて或ることを聞いたからね。先刻僕は全く偶然だつたが、或る確かなことを嗅ぎつけたのだ。その娘は幾歳ぐらゐになるかね。」

「顔を見ると十三ぐらゐだね。」

「背丈は朝に低いだらう。それであの阿魔があんなことを言ふのだ。都合のいゝやうに、十一だと言つたり、十五だと言つたりするのだ。それに、あの可哀さうな娘には保護者もないものだから、それで……」

「ほんとかね？」
 「ちや、君はどう思ふんだ？ ブブーノワ夫人が、同情一つで孤兒の娘なんか引取るものかね。そして、そこへあの肥大漢のアルヒーホフが關係してゐるんだもの、曰くがなくてさ。彼奴今朝ほどあの阿魔と會つたのだ。して、今日二人の計らひで、あのシヅブリューホフの木偶に上長官の細君で役所に勤めてゐる縹緞のいゝ女を取持つといふ約束をしたんだ。かうして放蕩に耽つてゐる商人の息子遣はしよつちう官等のことばかり探ねてゐるのだ。丁度羅典語の文典にある、あの『字義は無尾よりも重要なり』といふ格さ。だが、僕は一刻の酔ひが醒めないやうだな。それはさうとしてブブーノワにはあんなことは出来やしないよ。彼女は警察を誤魔化さうとしてゐるのだ、嘘を吐いてね。ところで彼女は僕が褻罪を知つてるといふことを承知してゐるので、僕を怖がつてるのだ……それやこれやでね——わかつたか？」

私はひどく驚いた。こんなことを知つたので私の心は波立つた。私は絶えず遅れはしないかと心配して車夫を急ぎ立てた。

「心配しなくともいゝよ。方法はちやんとあるから」と、マスロボーエフは言つた。「彼處にはミトロシユカもゐる。シヅブリューホフは彼に金で酬いるだらうが、あの肥大漢のアルヒーホフ奴は拳骨で酬いるだらう。その事はもう先刻決つたんだ。ところがブブーノワは僕の掌中にあるんだから——だから彼女には何にも出来やしないよ……」

二人は料理屋の前まで行つて其處で止まつた。が、ミトロシユカと呼ぶ男は其處にはゐなかつた。車夫に料理屋の支關のところまで待つてゐるやうに命じて私達はブブーノワのところへ行つた。ミトロシユカは私達を閉りところに待つてゐた。窓にはきら／＼した明りが映つてゐた。そしてシヅブリューホフの酔ひどれた轉が

るやうな笑ひ聲が聞えた。

「彼奴等は皆な彼處にゐます。もう十五分間くらゐになります。」とミトロシユカが告げた。「今が眞最中です。」

「だが僕等はどうして入るのだ？」と私は訊いた。

「お客のやうにしてさ。」とマスロボーエフは答へた。「彼女は僕を知つてゐるし、ミトロシユカだつて知つてるよ。實際どこも鍵がかゝつてゐるが、僕等を入れないためぢやないよ。」

マスロボーエフはかう言つて門を叩いた。と、門はすぐに開いた。門番が開けたのだ。彼はミトロシユカと眼くばせした。私達はそつと入つた。家の中では私達に氣がつかなくかつた。門番は私達を階段から案内して戸を叩いた。中から彼を呼んだが、彼は一人だと答へて「ちよつと用事があるんですが」と言つた。戸が開くと私達は一度に入つた。門番はすぐ隠れてしまつた。

「あれッ、誰方です？」と酔ひどれて髪を振り亂しながら、片手に蠟燭を持つて狭い玄關に立つてゐたブブーノワが叫んだ。

「誰方です？」と、マスロボーエフはすぐ言葉尻を捉へて「あなたこそどうしたんです。ブブーノワさん、大切なお客さんを忘れたんですか？ 僕等でなく誰です？……マスロボーエフです。」

「あら、マスロボーエフさんですか！ まああなたでしたか……大切なお客さんですつて……あなた何の御用ですか……私は……あの……どうぞ此方へ。」

彼女はすつかり狼狽へてしまつた。

「此方へつて何處ですか？ 其處は仕切りぢやありませんか……いや、あなたはもつとよく接待して下さいよ。」

僕等はあなたのところで冷酒を飲ませていたのですが、マセロチガ(酒)はありませんか。

女主人はすぐに元氣づいた。

「こんな大切なお客さんのためなら、地の中からでも探し出しますよ。支那の國からでも取寄せますよ。」

「だが、一寸、ブリーノワさん、此處にはシゾブリエーホフがゐませう？」

「あ……ゐますよ。」

「では、一寸彼に會ひたいですが、あの野郎なんだつて僕に隠れて遊んでるのだ？」

「でも、あの人は決してあなたを忘れちやみませんでせうよ。しよつちう誰かを待つてゐる様子でしたもの。大方あなたを待つてゐるんでせう。」

マスロボーエフは戸を推開いた。そして私達は卓子や、藤椅子や、それから見つともないピアノなどのあるありふれた小さな室へ入つた。だが、私達の入る前に、まだ私達が支那で話してゐる時にミトローシユカは姿を消した。私は後になつて知つたが、彼は入らずに戸の外で待つてゐたのだ。彼は後で誰かに戸を開けてやる積りであつたのだ。今朝ほどブリーノワの肩越しに眺めてゐた亂れ髪の赤い頬の女は彼の教母であつた。

シゾブリエーホフは卓子掛を被せた圓卓子の前の、赤く塗つた木製の狭い長椅子に坐つてゐた。卓子の上には燭をしたシャンパンの燭が二本と、下等なローム酒が一本あつた。菓子や、饅頭や、三種の胡桃の入つた皿があつた。卓子の傍には、シゾブリエーホフに向つて四十くらゐのそばかすだけの厭らしい女が坐つてゐた。黒い薄絹の衣服を着て、赤銅の腕飾を留針でつけてゐた。それは勿論偽稱の上長官夫人であつた。シゾブリエーホフは酔つて非常に機嫌が好かつた。彼の友人のアルヒーポフは一緒に居なかつた。

「此奴等は何かやつてゐるやがるな。」とマスロボーエフは聲一ぱい張り上げて叫んだ。「おい、デュツソへでも

案内しないか。」

「マスロボーエフさん、よくお出でよした！」とシゾブリエーホフは私達を迎へながら満足さうな顔を擧げて

言つた。

「飲んでるな？」

「御免下さい。」

「貴様言譯なんがせずに、お客様をもてなせ！ 貴様と散歩しようと思つてやつて來たのだ。そら、かういふお客様も連れて來た。」と、マスロボーエフは私を指さした。

「何よりです。よくお出で下さいました。……ヒ、ヒ、ヒ！」

「なんだ、これでもシャンパンといふのか！ まるで酔えたソツブのやうぢやないか。」

「ひどい悪口ですね。」

「貴様デュツソへ案内しないと見えるな。その癖、人を招んだりして！」

「この人は何かといふと、すぐ巴里へ行つたと言ふんですよ。」と上長官夫人は言つた。「乾世嘘なんでせう！」

「フヨオドシヤさん、そんなに人を侮辱するものではありません。確かに行つたんですよ。」

「まあ、こんな百姓が巴里なんかへ行かれるでせうか？」

「行きましたとも、行かれますとも。私達は彼處でカルブと二人で偉いことをやりましたよ。カルブを御紹介

しませうか？」

「私にあなたのカルブなんかを知る必要がありますか。」

「いや、その、なんです……政治上の用件でね。そして私達はあの巴里のジューベル夫人のところへ、イギリ

「何を壊したんです？」

「姿見です。壁から天井まで届くやうな姿見があつたんですよ。カルプはジュニベル夫人と密語で話し出すほど酔つてしまつたんです。そしてその姿見の傍へ立つて肘を凭らせてみました。すると、ジュニベル夫人は例の通り彼に叫んで「姿見は七百フランもするのにそれを壊しちゃつたんですね」と云ひました。彼は笑つて私を見てゐたが、私は後向きに椅子に坐つてみました。私と一緒に素敵な美人も坐つてゐたのです。そして居るうちに彼は拳骨で姿見を粉微塵に叩き壊しました。ジュニベル夫人は怒るの怒らないので、彼の鼻先へ來て例の泥棒呼ばりはじめました。すると、彼はジュニベル夫人に向つて金をやるから我々のすることに邪魔をするなと言つて、其處に六百五十フランを轉がしました。結局五十フラン儲けた譯です。」

この瞬間に、私達のゐた室から二間三間隔つた何處かで、恐ろしい、けたましい叫び聲が聞えた。私は身震ひして、矢張り同じやうに叫び出した。私はその叫び聲が解つた。それはエレナの聲であつた。その訴へるやうな叫び聲に續いて、他の叫び聲や、罵詈雑言、騒ぎが聞えた。そして終ひには、掌で顔を撲るはつきりした音がつんざくやうに聞えた。これは大方ミトロシユカが自分の仕事をやつてゐるのだなと思つた。と、不意にばつたり戸が開いた。そしてエレナが眞蒼になつて、ぼんやり濁つた眼付で、すつかりもみくちやになつて、ずた／＼に裂けた白い細木綿の衣服を着たまゝ、さも喧嘩でもしたかのやうに髪を振り亂して、室の中へ飛び込んで來た。私は戸に向つて立つてゐたが、彼女はまともに私の方へ駆け寄つて來て、両手で私に取りすがつた。みんな立ち上つて、がや／＼言ひ出した。彼女が出來ると、喚きや叫び聲がし出した。彼女の後からミトロシユカが姿を取り亂して自分の相手のアルヒーポフの髪を引摺りながら戸口に現はれた。彼は相手

を闖のところまで引摺つて來て、私達のゐる室に突き入れた。

「そら此奴だ！ 此奴を連れて行つて下さい！」とミトロシユカはすつかり満足したやうな顔をして言つた。

「あのね。」とマスロボーエラはゆつたりと私のところに近づいて來て、私の肩を叩きながら言つた。「車夫を呼んで、娘を連れて、家に歸り給へ。君は此處にはもう用はないんだ。後のことは明日巧く始末しよう。」

私はぐづ／＼しないで、すぐエレナの手を取つて、彼女をこの魔窟から連れ出した。後のことはどうなつたか知らなかつた。私達を止めもしなかつた。主婦さんは恐ろしさに慄へ上つてゐた。すべてが彼女の手を出す暇がないほど迅速に行はれた。車夫は私達を待ち設けてゐた。二十分ばかりの後には私はもう自分の家にあつた。エレナは半死半生の態であつた。私は彼女の着物を脱がせて、彼女を水で拭いて、長椅子の上に寝かせた。彼女は熱に浮かされ始めた。私は彼女の蒼ざめた顔や、色の褪せた唇や、彼女の黒い、一方に垂れかゝつた、併し油で撫でつけられた髪の毛や、彼女の白粉や、その薔薇色の靴、まだどこか形の残つてゐる衣服などを眺めた。そしてたゞこの嫌らしい事件の真相が解つた。不幸な少女よ！ 彼女は益々悪くなるばかりである。私は彼女の傍を離れないやうにして、その晩はナターシヤのところへはいかないことを決めた。エレナは時々その長い鬚毛を上げて私を見た。そして私をよく見別けようとするかのやうに、長いことまじ／＼と見詰めてゐた。夜中の一時頃になつて彼女は眠入つた。私は彼女の傍の床の上に寝た。

私は非常に早く起きた。一晩中殆んど半時間置きぐらゐに眼を覺ましては、私の可哀さうなお客の側へ行つて、注意深く打ち見付た。彼女は熱が出て軽く驚かされてゐた。が、朝になつて、ぐつすり眠入つた。いゝ微候だと私は思つたが、朝眼が覺めるとすぐ、彼女が眼を覺まさないうちに、早く醫者の處へ駈けて行つて來よう決心した。私は或る獨身者の人の善い老人で、下働きの獨逸女と一緒に住んでゐる醫者を知つてゐた。その人の處へ私は出掛けた。彼は十時に來ると約束した。私が彼の處へ云つたのは八時だつた。私は途中で無性にマスロボーエフの處へ寄りた氣になつたが、ちよつと考へた。彼は屹度まだ昨日から寢てゐるに違ひない。それにエレナが眼を覺まして、私の室に寢てゐるのを見て、そして私がゐないのに氣がついて吃驚するといかない。彼女はあの時病的状態にあつたから、いづつどうして私の處へ來たのか忘れてゐるだらう。

彼女は私が室へ入ると同時に眼を覺ました。私は彼女の傍へ近寄つてそつと容態を訊いた。彼女は答へなかつたが、その表情に富んだ黒い眼で長いことまじ／＼と見詰めてゐた。私にはその眼付で、彼女は何かもわかつてゐる、すつかり憶えてゐると思はれた。大方例の癖で私には答へないのであらう。私の處へ來てから昨日も一昨日も彼女は私の問ひには一言も答へないで、たゞその長い執拗い眼眸で私の眼に見入るのであつた。その眼眸には疑惑と劇しい好奇心と、それに一種の變な高慢な表情があつた。が、今は私は彼女の眼のうちに無愛想と、それから猜疑心さへあるのに氣がついた。私は熱があるかないか觸つて見ようとして、手を彼女の額へ當てたが、彼女は黙つて靜かに自分の小さな手で私の手を押し退けて顔を壁の方へ向けた。私は彼女の心

を亂さないやうにと其處を退いた。

私のところには大きな銅の茶釜があつた。私はもう疾うからそれをサモワルの代りに用ひて、それで湯を沸した。私のところには薪もあつた。門番はそれを私のところに五日分も一度に運んで來てくれた。私は燧燻を焚きつけて水を汲みに下りた。そして茶釜をかけた。卓子の上には私の茶器を準備した。エレナは私の方へ振り向いて、物珍らしさうに周圍の物を見てゐた。私は彼女に何か欲しくないと尋ねた。が、彼女はまたも私から顔を背向けて、何も答へなかつた。

『何だつて彼女は私に腹を立てるんだらう？』と私は思つた。變な娘だ。

例の老醫は約束に違はず十時にはやつて來た。彼は病人を獨逸式に注意深く診察してから、私に向つて發作状態には違ひないが、大した危険なことはないと言つて強く安心させた。それから彼は彼女に心臟病のやうな他の持病があると附け加へて、『この點に特別な注意が要りますよ。が、今は危険でもありません』と言つた。彼は彼女に混和劑と、それから必要といふよりも寧ろさうした習慣のために何かの散薬をも與へた。そしてすぐ私に向つて彼女がどうして此處へ來たかと訊き始めた。同時に彼は私の室を吃驚したやうに見廻した。この老人は驚くべき饒舌家であつた。

エレナは彼を驚かした。彼女は彼が脈搏を量らうとした時その手を振り攪つた。彼に舌を見せるのも厭がつた。彼の問ひには何も答へなかつた。たゞ彼の胸の上でゆら／＼してゐるスタニスラフの大きな動脈を絶えずちつと見詰めてゐた。『この娘は屹度頭が非常に痛んでゐるのだ』と、老人は注意した。『だが、どうしてあんな眼付をしてゐるのだ。』私は彼にエレナのことを話すにも當るまいと思つたので、それには長い話があるといつて言ひ逃れた。

「若し用があつたらすぐ知らして下さい。」と彼は出掛けに言った。「だが、今のところ大丈夫です。」

私は一日中エレナと一緒にゐて、全快するまでは成るべく彼女を一人で残さないやうにと決めた。だが、ナターシャとアンナ・アンドレーウナが私を空しく待ち閉えてゐるかも知れないと思つたので、せめてナターシャだけでも今日行かないといふことを郵便で知らせようと決めた。アンナ・アンドレーウナには手紙は出さなかつた。彼女は私が一度ナターシャの病氣を知らせてやつた時からといふものは、もう決して手紙を送つてくれるなと自分から私に頼んだのであつた。「お爺さんもお前さんの手紙を見ると顔を曇めるんですよ」と彼女は言つた。「そして情の深いあの人のことだから手紙に何が書いてあるか知りたいのは山々だけれど、それを尋ねることが出来ないのです。氣が引けるんですよ。そこで一日中機嫌が悪いのです。そればかりぢやありませんよ。一體お前さんの手紙は私の氣を前立たせるばかりですもの。十行ばかり何になります。で、もつと詳しく尋ねたくつてもお前さんはゐないのである。」かう彼女は言つた。それで私はナターシャだけに書いた。そして薬店へ処方箋を持つて行く時に同時に手紙も出した。

そのうちにエレナはまた眠り始めた。夢のうちに彼女は軽く唸つたり、身體を慄はせたりした。醫者のみたと通り彼女はひどく頭痛がしてゐたのだ。時々彼女は軽く叫んで、眼を覺ました。彼女には私の注意が殊更に心苦しいかのやうで、忌々しさに私を見た。實際私はそれが非常に苦痛であつた。

十一時にマヌロボーエフが來た。彼は忙しさに、さも氣がなさうであつた。私のところへは一寸立寄つたのであつた。そして何處かへ非常に急ぐ様子であつた。

「や、君！ 僕は君が質素な生活をしてゐると思つてゐたが。」と彼はあたりを見廻しながら言つた。「併しこんな箱のやうな室に住んでゐるよとは思はなかつたよ。こりやまるで箱だ。室ぢやないよ。だが、それはま

あいつとして、たゞいけなしいのはいろんな餘計な心配が君の仕事の邪魔になることだよ。僕は昨日君とブリーフへ行つた時にさう思つたよ。僕は自分の性質として、また社會で占めてゐる僕の地位として、自分では正しい道を踏まないでも他人には法を説く人々の部類に屬してゐるのだ。まあ聴き給へ、僕は明日か明後日君のところへ寄るが、君は日曜日の朝には乾度僕のところへ來給へ。その頃には大方この娘の一件が全く落着くだらうと思ふ。その時に僕は君と眞面目に話したいことがある。なぜつて君に眞面目に言はなければならぬとがあるからな。こんな生活をしてゐられるものではないよ。僕は昨日はただ君に灰かしたただだが、今は論理的に考へるよ、だが、要するに君は僕から一時お金を融通するのを潔しとしないかね……」

「さうむきにならなくてもいいよ……」と私は彼の言葉を切つた。「それよりも君の方は昨日どう決まつたね？」

「そりや立派に片がついて、目的を遂げたよ。いゝかね？ 今僕は暇がないのだ。僕は暇がないので君のところへ來られないといふことを、一寸君に知らせに寄つたのだよ。だが序に訊くがね、君は彼娘を何處かへやるのか。それとも自分のところへ留めて置くのか。どうするね？ これはよく考へて決めなけりやならんからね。」

「そのことは僕もまだよくは決めないが、實は君と相談しようと思つて待つてゐたのさ。だが、どんな理由で僕は彼女を自分のところへ置かれるだらう？」

「なに、そりや譯はないさ。女中のやうな風でもいゝさ。」

「君靜かに言つてくれ給へ。彼女は病氣だけれど、全く正氣だからな。僕は見てゐたが、彼女は君を見ると身慄ひした様子だつたよ。昨日の事を思ひ出したらしかつた……」

そこで私は彼女の性質や、彼女に就いて私が氣のついた點をすつかり話した。私の話はマスロボーエフの興味を惹いた。私は彼女を或る家に住まはせるかも知れないと付け加へて、イフメニエフ老夫婦のことを簡単に話した。私の吃驚したことは、彼がナターシヤの話を幾分か知つてゐるらしいことであつた。私が何處から聞いたかと訊くと彼は、

「何さ、久しい前に或ることの序でに一寸耳にしたよ。僕はいつか君に僕がワルコフスキ侯爵を知つてゐるといふことを言つたぢやないか。君がエレナをその老婦のところへやらうといふのはいいことだよ。でないよあの娘の君邪魔になるよ。それからまたあの娘に何か保證でも要るといふことならそれは心配はないよ。僕が引き受けるから。では、失敬する。時には寄り給へ。あの娘は今どんな様子かね、寢てるかね？」

「さうだらう！」と私は答へた。

が、彼が出るや否やエレナはすぐ私を呼んだ。

「あれは誰方？」と彼女は訊いた。彼女の聲は震へてゐたが、相變らずぢつと眼を据ゑて、尊大な眼付で私を見てゐた。さういふより外に言ひ現はしやうがなかつた。

私は彼女に彼はマスロボーエフといふ人だと言つた。そしてあの人のお蔭でお前をブリーノワの手から救つたのだといふことや、ブリーノワはマスロボーエフを非常に怖がつてゐるといふことなどを話した。彼女の頬はあのことを思ひ出したせゐるか、急にぼつと赤くなつた。

「ではあの女はもう決して此處へ來ないの？」とエレナは私を試すやうに見ながら訊いた。

私は彼女の氣を宥めてやつた。彼女は一寸黙つて自分の熱い手で私の手を握つたが、さうにさも氣がついたといつた風に突き放した。彼女はそんなに俺をいやがる筈はないかと私は思つた。これは彼女の癖だらう。そ

れとも……それともこの不幸な娘は餘りに多くの苦しみを嘗めたので、世の中の誰をも信じないやうになつたのかしら。

既定の時刻に私は薬を取りに下りた。序でに私の知つてゐる料理屋にも寄つた。其處は私が時々晝飯を食べに行くので私を信用してゐた。その時私は家から出る時に薬味入を持つて行つた。そしてエレナのために鶏のソップをその料理店から持つて來たが、彼女は食べるのを厭がつた。で、ソップは暫く燗燗にかゝつたまゝであつた。

彼女に薬を飲ませて私は自分の仕事に取りかゝつた。私は彼女が眠つてゐるとばかり思つてゐたが、ふと見ると彼女は頭を擧げて私の書いてゐるのを見成つてゐた。私は彼女を見ない振りをしてゐた。

やがて彼女はぐつすり眠りに就つたが、私の非常に嬉しかつたことは、彼女が讒言も云はず、唸き聲も立てず、すや／＼と眠つてゐる事であつた。私には種々な心配が起つた。何事のあつたとも知らないナターシヤは私が今日行かなかつたのでやきもきしてゐるかも知れない。そればかりでなく今のやうな大切な場合に私が彼女のことに氣を留めないのを見て、大方非常に怒つてゐるに違ひない。かう私は思つた。それに彼女には今或る心配事があつて、私に何か頼み事があるのだらうが、私は故意にでもしてゐるやうに彼女の許に行かないのだ。

アンナ・アンドレーウナはと言へば、私は明日彼女に何と解解をしていゝか解らなかつた。私は考へて考へ抜いた揚句、急に双方へ駈けて行つて來ることに決心した。それには二時間ばかり留守をしなければならぬのだが、エレナは今眠つてゐるから私の出て行くのに氣がつくまい。私は立ち上つて、外套を引つかけて、帽子を取つた。が、いざ出ようとすると突然エレナは私を呼び止めた。私は吃驚した。彼女は眠つた風をしてゐ

たのだなと思つた。

序でに記すが、エレナはさも私と話をするのが厭だといふ風に見せてゐたが、この度々の呼び聲や、私に對する猜疑が如何にも嫌惡の感じを證明してゐた。だが、その實私には却つて快かつたくらゐである。「あなたは私を何處へやるの？」と私が彼女に近寄つた時彼女は訊いた。一體に彼女はいつも私に取つては、全く出し抜けなほど不意に、何か尋ねるのであつた。この時なんか私はすぐには彼女の言つたことが合點が行かなかつた。

「さつきあなたはお客さんと私を何處かへやると話してゐたでせう。私は何處へも行きたくないわ。」

私は彼女の方に身を屈めた。彼女はまた發熱してゐた。そしてまた發作状態にあつた。私は彼女を慰めたり力をつけたりした。若し彼女が私のところに残つてゐたいといふなら、私は彼女を何處へもやらないと確言した。かう言ひながら私は外套と帽子を脱つた。こんな容態になつてゐる彼女を一人で残して行く氣にはなれなかつた。

「あなたお出掛けなさいよ！」と、彼女はすぐに私が家にゐようとしたのを察して言つた。

「私睡いから、今すぐ眠入りますよ。」

「では、お前一人であつてくれるか？」と私は躊躇しながら言つた。だが、私は乾度二時間も経てば歸つてくるよ……」

「さあ、お出掛けなさい。でないよ、私が一年も病氣でゐれば、あなたは一年も此處を出られない譯でせう。彼女は笑顔を見せようとしたやうであつた。そしてさも彼女の心のうちに喚び起された或る善良な感情と闘つてゐるかのやうに妙に私を眺めた。不幸な少女よ！ 彼女は見たところ、人馴れぬ無愛想な風をしてゐるが、そ

の優しい善良な心は外部へ現はれずにはゐなかつた。

最初に私はアンナ・アンドレウナのところへ駆けつけた。彼女は私を堪へ切れない程やきもきして待つてゐた。で、私が行くと頭から責め立てた。彼女は非常に恐ろしい不安を感じてゐる様子であつた。イフメニエフ老人は晝飯を食べるとすぐ外へ出掛けたが何處へ行つたかわからなかつた。私は老婆が堪へ兼ねて老人に例の通りそれとなくすつかり話して了つたらしい様子に氣がついた。が、やがて彼女自身そのことを私にすつかり打明けて、こんな喜びを老人に頼たないでゐるのに忍びなかつたと話した。が、イフメニエフ老人は彼女の話によると雨雲よりも暗い顔をして何も言はなかつた。「黙つてばかりゐて私の問ひには返事もしなかつた」さうである。そして晝飯後ふいと出たつきりそのまゝまだ歸らないといふことであつた。かう言つてアンナ・アンドレウナは恐ろしさに身慄ひをしないばかりであつた。そして私に自分と一緒にイフメニエフを待つてゐてくれと願つた。私はそれを拒んで、彼女にひよつとしたら明日は來ないかも知れない、私は自分でそのことを知らせるために來たのですとぶつきら呼々に言つた。この時二人は言ひ争ひをしたほどであつた。彼女は泣いて、そしてきつく、ひどく私を責め立てた。が、私が出口から出ようとする、彼女は不意に私の頭に抱きついて両手で堅く私を抱き緊めた。そして私に孤兒同様の彼女を怒らないやうに、また彼女の言葉を悪く取らないやうにと言つた。

ナターシャは意外にもまた一人つきりであつた——變なことにはどうも彼女が今度に限つて、昨日やその以前のやうに私の訪問を餘り喜んでゐないやうに思はれた。さも私が彼女を腹立たせたか、邪魔でもしたかのやうであつた。今日アリョーシャは來たかと私が尋ねると、無論來たことは來たが一寸だつたと彼女は答へた。そして今夜來る約束をして行つたと、さも思ひに沈んでゐるかのやうな風で附け足して言つた。

「ぢや、昨夜は来ましたか？」
 「い、いえ、家でよこさなかつたさうです。」と彼女は早口に言った。「だけど、あなたのお仕事はどうです？」

私は彼女がなぜか私の話を言ひ終らして、他のことへ向けようとしてゐるのに気がついた。私は彼女をまじまじと見成つた。彼女は見たところ、心を取り亂してゐるらしくつた。彼女は私がじろくくと彼女の様子に眼をつけて彼女に見入つてゐるといふことに気がつくつと、急に素早く腹立たしさうに、腕きつけるやうな力の入つた眼付で私を見詰めた。彼女にはまた悲しいことが起つたに違ひないが、彼女はそれを私に言ふのが厭なのだらうと思つた。

ナターシャが私の仕事のことを尋ねたので、その返事として私は彼女にエレナのことをすつかり細々と話した。私のこの物語が非常に彼女の興味を惹いて彼女を驚かした。

「あらまあ！ あなたはその娘をたゞ一人つきりで残して来たんですか、病人を！」と彼女は叫んだ。

「今日はあなたのところへは失禮しよるかと思つたんですが、あなたに怒られるかも知れないと思つて、それに何か私に用事がないとも限らないと思つて来たのです。」と私は言つた。

「用事？」と彼女は胸の中で何か考へながら、懇話を言つた。「さう／＼あなたに用事があるのですよ。ワニーヤさん。ですけど、ね、また今度にしませう。私の家へお寄りくだすつたの？」

私は寄つたことを話した。

「ですけど、この知らせをお父さんはどう受けて下さるかわかりませんわね。だけど承知する筈はありません……」

「なぜ承知する筈がないと云ふのです？」と、私は尋ねた。「こんなに事情が變つて来たのに！」

「え、まあそれはさうですけど……お父さんはまた何處へ行つたのでせうね？ 先日あなたは私のところへ来たのだらうとお考へでした。あのね、ワニーヤさん、若し御都合がよかつたら、明日私のところへ寄つて下さいな。ひよつとしたら、私あなたに何か話したいことがあるかも知れませんわ……たゞね、あなたに御心配を掛けるのが苦しくつてね。ですけどあなたはもうお宅のお客さんのところへお歸りなさるでせう。もうあなたが家を出てから大方二時間くらゐ経つたでせう？」

「その位経ちました。ではさやうなら、ナターシャさん。ですがアリオーシャは今日あなたとはどんなでした？」

「アリオーシャがどうするものですか。なんともありませんでしたよ……まあほんとにあなたは物好きですわね。」

「ではまたお目にかゝりませう。」

「さやうなら。」と、彼女は如何にも心なさうに私に握手して、私の最後の別れの眼付に顔をむけた。私はやゝ呆氣に取られた體で彼女のところから出た。だが、彼女にも何か考へることがあるだらうと思つた。冗談事ぢやないからな。だが、明日になれば彼女の方から何か話すだらう。

私は憂ひに沈みながら家に歸つた。が、室へ入ると吃驚した。室の中はやゝ薄暗かつた。見ると、エレナは深く物思ひに沈んでゐるかのやうに、首垂れて長椅子に腰を掛けてゐた。彼女は丁度失神してゐるかのやうに私を見なかつた。私は彼女の傍へ近寄つた。すると、彼女は口の中で何か呟いてゐた。こりや讒言でも言つてるのかしら？ と私は思つた。

「エレナや、おい、どうしたのだ？」私は彼女の傍へ坐つて、彼女の手を執つて訊いた。「私、この家から出たいわ……私はあの女のところへ行つた方がいゝわ。」と彼女は私の方へ頭も擧げないで言つた。

「何處へ？ 誰のところへ？」と私は吃驚して尋ねた。

「あの女のところへ、ブローノリのところへよ。あの女はいつも私があつた女に澤山借金があると云つてよ。あの女は私のお母さんを自分の金でお葬ひしてやつたと言つてよ……私あつた女にお母さんのことを悪く言はれるのは厭だわ……私はあの女のところで働いて、借金をみんな返してしまひたいわ……さうしてから、自分であつた女のところを出てしまふの。だけど、今度はあの女のところへ歸つて行くの。」

「しつかりおしな、エレナ！ 彼女のところには行かれないよ。」と私は言つた。「彼女はお前を苛めるぢやないか。彼女はお前を苛め殺してしまふよ……」

「苛め殺したつていゝわ。酷いことをしたつていゝわ。」とエレナは熱して言つた。「私一人ぢやないわ。他の人達だつて私よりもつと辛いさうだわ。それを私は皆で乞食の女に聞いてよ。私は貧乏の儘でいゝわ。一生貧乏で暮したいわ。お母さんは亡くなる時に私にさう言つたんですもの。私は働きますよ……私はこんな衣服を着るのは厭ですわ……」

「私は明日お前に他の衣服を買つてやるよ。私はお前に本を持つて来てやる。お前は私のところで暮してゐるのだ。私はお前が自分で望まない限りは誰にも歸さないから安心しなよ……」

「私、下働きの女に雇はれてよ。」

「よし、よし！ だが、心配しないで寢床に入つておやすみよ！」

不幸な少女の眼には涙が溢れてゐた。が、次第に涙が乾き泣きになつた。私は彼女をどうしたらいいかわからなかつた。水を持つて来て彼女の顔や頭を拭いてやつた。たうとう彼女は全く力が盡きて、長椅子の上へ倒れてしまつた。彼女はまたも熱に襲はれ始めたのだ。私はそこらにあつたものを彼女に覆ひ被せた。體で彼女は眠り始めたが、不安らしく時々身體を震はせて眼を睜ました。私もその日は餘り歩きもしなかつたが、非常に草臥れて、自分で出来るだけ早く寢ようと思つた。が、堪へない心配が私の頭の中で渦巻いた。私はこの少女のことで、これからいゝんな心配が湧くだらうといふことが豫感された。が、何よりも私を心配させたのはナターシャの一件であつた。今になつて思ひ出すと、私はその夜、眠りに就いた時のやうな重苦しい心持になつたことは稀であつた。

九

朝遅く九時頃に眼が覺めてみると私は病人であつた。私は眩暈がして頭が痛んだ。エレナの寢床を覗いて見ると、寢床は空虚であつた。と、その時私の右の部屋から誰かさら／＼と板の間を掃いてゐるやうな音が聞えた。私は出て見た。と、エレナは片手に箒を持つて、片手で昨日からまだ脱がない新調の衣服を折りながら板の間を掃除してゐた。煙爐に燃やす薪は隅の方へ片づけられ、卓子には雑巾をかけ、茶器は立派に拭いてあつた。みんなエレナが片づけたのである。

「これ、エレナ！」と私は叫んだ。「誰がお前に板の間を掃けと言ひつけた？ そんなことをしてはいけないよ。お前は病氣ぢやないか。お前は私のところへ下女に來たのではないよ！」

「でも、誰が此家の板の間を掃くのか？」と彼女は身體を擡げて、まともに私を見ながら答へた。「もう病氣ぢやなくてよ。」

「だが、私はお前を働かせるために連れて来たのぢやないよ。エレナ、お前は私のところで何もしないであらうと私がブーノワのやうに叱るだらうと思つて、恐がつてでもゐるのか？ お前は何處から、その汚ない帯を持つて来たのだ？ 私のところには帯なんか無かつたぢやないか？」と私は吃驚したやうに彼女を見ながら言つた。

「これは私の帯なのよ、私これを自分で持つて来たの。私はお祖父さんにも此處で板の間を掃いてやつたわ。この帯は、その時から其處の穀廬の下においてあつたのよ。」

私は思ひに沈みながら室へ歸つた。私は或ひは過つたのかも知れない。だが、私にはどうも私の厚遮が、彼女に取つては却つて心苦しいやうで、彼女はどうかして私の家で徒食してゐるのではないといふ事を見せようと努めてゐるらしく思はれた。もしさうなら何といふいぢけた性質だらう？ と私は思つた。二分ばかりすると彼女は入つて来て、黙つてびく／＼しながら私を見て、長椅子の上の、昨日自分が坐つてゐた場所へ坐つた。そのうちに私は湯沸器を沸して、茶を入れて、茶碗へ注いだ。そして白いパンの一片を添へて彼女に與へた。彼女は黙つて詮方なささうにそれを取つた。一晝夜、彼女は何も食へなかつたのだ。

「その折角のいゝ衣服を帯で汚してしまつたぢやないか。」と、私は彼女の袴の裾に大きな汚れ目のあるのを見て言つた。

彼女はよく／＼見てみたが、出し抜けに茶碗を押しやつて、一見さも冷かに、落着いた態度で自分の袴の縫目を両手で引張つて、それを下から上まで一裂きに引き裂いた。さうしてから彼女は黙つて、私にもつと輝

いてゐる眼を上げた。彼女の顔は蒼ざめてゐた。

「お前は何をするので、エレナ！」と私は自分の前に狂人でも見てゐるやうな氣になつて叫んだ。

「これは悪い衣服よ。」と、彼女は氣を背立て、殆んど喘ぎながら言つた。「なぜあなたはこれをいゝ衣服だと仰言つたの？ 私、これを着るのが厭よ。」と、彼女は急に其處を立上つて叫んだ。「私、これを引裂いぢまふわ。私はあの女に衣服なんか強請つたことはないわ。あの女は、自分で私に無理に着せたんですのよ。私はもう一枚引裂いたことがあつてよ。これを引裂きます！ 引裂きます！……」

と、彼女は躍起となつて、自分の不幸な衣服の上に身を屈めて、一寸の間にそれをずた／＼に引裂いてしまつた。彼女が裂き終つた時、彼女の顔は眞蒼になつて、其處へ倒れさうに見えた。私は吃驚しながらその亂暴な舉動を見てゐた。彼女の方でも私を一種挑むやうな眼付で見つてゐた。さも私までが、彼女の前に何か悪いことでもしたかのやうに。しかし私はその時もう私がどうしていゝか分つた。

私は、速その日の朝、彼女に新しい衣服を買つてやらうと考へた。こんな劇しい残忍性の者は親切に取扱つてやらなければならなかつた。彼女は丁度まだ一度も善人を見たことがなかつたやうな風に見るのであつた。若し彼女が殘酷な所帯をも厭はず、以前にもかうした衣服をずた／＼に引裂いたことがあつたとすれば、つい近頃のあんな恐ろしいことを思ひ出させる衣服を見て、彼女が今こんな酷たらしい氣持になつたのは無理もないことである。

古着屋通りでは、可なり好い平笠が非常に廉く買へた。たゞ生憎その時私は一文も金がなかつた。が、私は前夜寢床に就きながら今日は金の工面の出来さうなところへ行かうと考へた。が、其處へ行くには丁度古着屋通りを通らねばならなかつた。私は帽子を取つた。エレナはさも何か待ち設けてゐるかのやうに私の方をじ

ろく見えてゐた。

「あなたはまた私を閉ぢ込めて行くのね？」と彼女は私が昨日も一昨日もしたやうに室を閉めようとして鍵を取つたのを見て訊いた。

「お前ね」と私は彼女の傍へ近寄つて言つた。「この事を怒つちやいけないよ。私は誰か来るといけないから鍵を掛けて行くのだよ。お前は病氣だから吃驚するといけないからな。それにどんな奴が来るか知れないよ。ひよつとしてブブーノリでもやつて来ないとも限らないからな……」

私は慥とかり言つた。が、實は彼女を疑つてゐたから閉めて行くのだ。私には彼女が急に私のところを逃げ出すやうな氣になりはせぬかと思つたから、當分氣をつけようと決めたのだ。エレナは黙つてゐた。で、私は今度もさうして彼女を閉ぢ込めて出た。

私はもう三年も或る叢書を出版してゐる一人の出版業者を知つてゐた。何か急に金が要るやうな時は、私はよくその人のところから仕事を取つた。彼は几帳面に拂つてくれた。で、私はその人のところへ出掛けた。そして私は一週間のうち或る一篇を編纂する約束で二十五ルーブリを前借りして来た。が、私は自分の小説にかこつけて時日を延ばす積りであつた。私はひどく困つてくるといつもさうしたのである。

金が手に入つたので、私は古着屋通の方へ行つた。其處で私はちぎに、いろんな襦袢を買つてゐる馴染の古着屋の老婆を見つけた。私は彼女にエレナの身丈をおほよそ言ふと彼女はすぐさま私にさつぱりした、更紗のごく丈夫さうな、まだ一度ぐらゐしか洗濯してない衣服を格廉で選り出してくれた。ついでに私は襦袢をも買った。金を勘定しながら、私はまだエレナに上衣かマントか、何か要ると思つた。時候が寒いのに彼女には何もなかつたのだ。が、私はその買物をこの次に延ばした。エレナはあんな怒りっぽい高慢ちきな娘だ。この

衣服も私は選ばれるだけ質素な、目立たない、ごく平常着らしいのを態と選つたのではあるが、彼女はどう受けるかわからなかつた。でも、私はその他に綿糸の靴下を二足と毛糸のを一足買つて来た。私は彼女が病氣なのに室の中が冷たいからといふ口實で彼女にやる積りであつた。彼女には下着も要るのであつた。が、私はそんなものは彼女がもつと私に親しくなじむ時まで延ばすことにした。その代りに私は寢臺に吊る古い帷帳を買つた……それは是非なくてはならなかつた。そして、それはエレナを非常に満足させるだらうと思つたので。

こんな物を持つて、私は午後一時頃家に歸つた。私はエレナに私の歸つたのが聞えないやうに、そつと静かに鏡を開けた。見ると、彼女は卓子の傍に坐つて、私の本や、書いた物を讀んでゐた。私の歸つたのを聞きつけて、彼女は手早く讀んでゐた本をばつたりと閉ぢて顔を眞赤にして卓子を離れた。私はその本を取つて見ると、それは表紙に私の名前の載つてゐる、私が單行本として出した最初の小説であつた。

「あなたのお留守に此處を誰か叩いてよ。どうして鍵を掛けたんだつて、さう言つてましたの。」と彼女はさも私に當てこするやうな調子で言つた。

「ぢや、お醫者さんぢやなかつたか。」と私は言つた。「お前返事もしなかつたのか、エレナ？」

「え。」

私は黙つて、包みを出して解いた。そして買つて来た衣服を出した。

「そら、エレナ！」と私は彼女の傍へ寄つて言つた。「お前そんな襦袢を着ちやいけないよ。私はお前に衣服を買つて来たよ。平常着のごく廉いのだから心配しなくてもいい。みんなで一ルーブリ二十コペークしかかゝらなかつたよ。身體が癒るやうにこれを着なさい。」

私は彼女の傍へ衣服を置いた。彼女は眞赤になつて、しばらくの間眼を睜つて私をぢつと見てゐた。

彼女は非常に吃驚したのであつた。同時に彼女はたまらなく羞かしかつたやうに私には思はれた。が、彼女の眼には何となく柔かい優しい色が輝いてゐた。彼女が黙つてゐるのを見て、私は卓子の方へ向き直つた。私の舉動が彼女を驚かした。が、彼女は強ひて自分を制して、下を見詰めたまゝ、腰を掛けてゐた。

私は頭痛がして、益々眩暈が劇しくなつてきた。新鮮な空気も私には何の益もなかつた。然しナターシヤのところへ行つて来なければならなかつた。彼女に就いての私の不安は昨日よりも減らないのみか、却つて益々募るばかりであつた。と、不意にエレナが私を呼んだやうな氣がした。私は彼女の方を振り向いた。

「あなたは出る時に私を閉ぢ込めないで頂戴！」と、彼女は横の方を向いて、指で長椅子の縁を擦りながら、さもそのことに熱中してゐるといつた風に言ひ出した。「私あなたのところから何處へも行かないから。」

「よし、エレナ承知したよ。だが、誰か他の人が来たらどうする。それもね誰が来るかわからないからね。」

「では、鍵を私に置いて行つて頂戴な。私内から閉めときますから。そして誰か叩いたらお留守ですつて、さう言ひますよ。」と、彼女はさも「ほら、さうすれば何のことはないぢやありませんか」と言つたやうな風に私を救さうに眺めた。

「あなたに誰が下着の洗濯をしてやるの？」と、彼女は私が彼女に何とか返事をする前に不意に尋ねた。

「この家に女がゐるよ。」

「私だつて下着の洗濯なら出来てよ。それからあなたは昨日何處で御飯をあがらつたの？」

「料理屋で。」

「私だつてお料理が出来てよ。私あなたに御飯を拵へて上げるわ。」

「およしよ、エレナ。お前にどんな料理が出来る？ お前はいつも突拍子もないことばかり言ふね……」

エレナは黙つて下を垂れた。私の言つたことが彼女を腹立たせがらしかつた。少くとも十分ほど経つたが二人は黙つてゐた。

「ソツプのお料理。」と、彼女は俯向いたまゝ不意にかう言つた。

「どうしてソツプだ。どんなソツプだ？」と私は吃驚して訊いた。

「私はソツプを拵へてよ。お母様の病氣の時に拵へて上げたわ。そして私市場へも行つてよ。」

「驚いたなあ、エレナ、ほんとに驚いたよ。お前は何といふ強情な娘だらう。」と私は彼女の傍へ近寄つて、長椅子に並んで坐つた。「私は私の心の命ずる通りにお前を大切にしてゐるのだ。お前は今近親のものもないつた一人ぼつちの不幸な娘だ。私はお前を助けたいのだ。私が悪い時には矢張りお前が私を助けることが出来るぢやないか。だにお前はさうは思はずにかうして私からつまらない贈物を受けるさへ厭だといふのか？ してお前はこの贈物のためにすぐ恩返しをしようとして、私が丁度ブリーノワのやうにお前を叱りでもするかのやうにお前は働きたがるのだね。」

彼女は答へなかつた。彼女の唇は慄へてゐた。彼女は何か私に言ひたさうであつた。が、彼女は固くなつて黙つてしまつた。私はナターシヤのところへ行かうとして起ちあがつた。今度はエレナに鍵を渡して、若し誰か来て戸を叩いたら誰方ですと呼んで尋ねてくれと頼んだ。私は確かにナターシヤの身に何かよくなることが起つたに違ひないが、前にも一度あつたやうに彼女は時の来るまで隠してゐるのだと思ひ込んだ。兎に角私は彼女のところへ寄るのは一分間といふことに決めた。それでないと私は彼女に煩さく思はれるだらうから。その通りであつた。彼女はまた私を不満さうな、冷たい眼眸で迎へた。すぐそこを出なければならなかつたのだが、私の足は縮み上つた。

「私はあなたのところへちよつと来たのです、ナターシャさん。」と、私は言ひはじめた。「私のところのお客をどうしようかといふ、その相談に来たのです。」

かう言つて私は口早にエレナのことをすつかり話した。ナターシャは私の言ふのを黙つて聴いてゐた。

「どうお勤めしていかかわりませんわ、ワニーヤさん。」と彼女は答へた。「それで見ると、その娘はほんとに變な娘ですね。大方ひどく辱められたり威嚇かされたりのせう。せめて病氣でも癒してお上げなさいな。あなたはその娘を私共の家へ遣りたいと仰言るの？」

「彼女はいつも私のところからは何處へも行かないと言つてゐるのです。それにあの老人達が彼女をどう受けて下さるか、それも分らないのです。ですが、あなたはどうですか？ あなたは昨日はお加減が悪いやうでしたか？」と、私はおづ／＼しながら尋ねた。

「え……私は今もなんだか頭痛がしますの。」と、彼女は氣のなさうに答へた。「誰か家の人には會ひませんでしたか？」

「いえ、明日寄る積りです。明日はそら土曜日でせう……」

「それがどうしたの？」

「晩には候爵が来るでせう……」

「それがどうしたの？ 私だつて忘れやしませんよ。」

「いや、私はたゞその……」

彼女は私の前にまともに立ち止まつて長いことまじ／＼と私の眼を見詰めてゐた。彼女の眼には或る決心と一種の強情と撞撃したやうな熱病らしい表情が現はれてゐた。

「あのね、ワニーヤさん。」と、彼女は言つた。「悪く思はないで下さい。そして私のところから歸つて下さい。あなたがいらつしやると困りますから……」

私は椅子から立ち上つた。そして言ひ現はし難い驚きの眼で彼女を睨つた。

「あなた、ナターシャさん！ どうしたのです？ 何事が起つたのですか？」と、私は恐る／＼叫んだ。

「なんでもありませんよ。みんな、みんな、明日になればわかります。だけど今は私一人であつたいのですよ。ねえ、ワニーヤさん、今は出て行つて下さい。私はあなたに顔を合せるのがほんとに辛いのですよ、ほんとに辛いのですよ！」

「ですが、せめて私にだけ話して下さいよ……」

「みんな、何もかも明日になればわかりますよ、あゝ、ほんとに！ ねえ、あなた出て行つて下さいませんか？」

私は出た。私はあまり吃驚したので何が何やら憶えてゐなかつた。マウラは私の後から支關を出て来た。

「どうしたの、怒つてるの？」と彼女は私に訊いた。「私もうあの女の傍へ行くのも怖いのですよ。」

「一時彼女はどうしたんだ？」

「ほら、家の人がね、三日も顔を見せないのですよ！」

「なに、三日も？」と私は慌ただしく訊いた。

「だつて、彼女はアリオーシヤが昨日の朝来て、それから晩にも来る筈だと昨日私に言つたよ……」

「何が夜来るものですか！ あの男は朝だつて全く来はしませんでしたよ。ほんとに一昨日から顔を見せないのですよ。あの女は自分で昨日の朝来たと言つたんですか？」

「自分で言つたよ。」

「それぢや、あの……」と、マウラは考へながら言つた。「あなたの前では、來なかつたと打明けるのが厭なからみですから、餘程それが辛いんですま。ねえあなた？」

「一晩まあどうしたといふのだ！」と、私は叫んだ。

「そりやね、あの女にはどうしたらいいか分らないのですよ。」と、マウラは手を擴げて言ひ續けた。

「昨日私は二度まであの男のところへ使ひにやられましたか、二度とも途中から歸つて來ましたの。それで今日は私に口も利かないんですよ。せめてあなたでもあの男と會つて下さればいいのですが。私はもう彼女のところから離れられせんわ。」

私は夢になつて階段を下りた。

「晩には私共のところへお出でになりますか？」と、マウラは私に叫んだ。

「彼方の様子で」と、私は歩きながら答へた。「私はひまつとしたらお前のところへ様子を聞きに寄るよ、故障さへなければな。」

私は實に何かに私の心臓をどしんと打たれたやうな感じがしてゐた。

十

私は眞直にアリヨシヤのところへ出掛けた。彼はマリラヤ・モルスカヤ街の父のところに住んでゐた。侯爵の家は彼一人つきりしか住んでゐないのだが、可なり大きかつた。アリヨシヤはこの家の二つの立派な室

を占めてゐた。私が彼のところへ行つたのはごく稀れで、今度で二度目であつた。彼は私のところへ足繁くやつて來る。殊にナターシヤと關係した最初の頃。

彼は留守であつた。私はいきなり部屋の中へ入つて彼にかういふ置手紙を書いた。

「アリヨシヤ君、君は氣でも狂つたのではないか。去る火曜日の夜、君の父上は自分で君のためにナターシヤの許に來て、彼女に君の妻となるやうに乞うたではないか。そして君がその乞ひを喜んだことは僕が證人です。然るに君の現在の行動がやゝ奇怪であるといふことは君自身も認めるだらう。君はナターシヤに對して如何なることをなしてゐるか、解つてゐますか？ 兎に角僕のこの手紙は君の行爲が、君の未來の妻たる者の前に甚だ不當な輕率な行爲であることを君に思ひ起させるだらう。僕は君に教訓がましいことをいふ権利のないことはよく承知してゐるが、しかしそれは僕の意に介するところではない。」

二伸、この手紙のことは彼女は何も知らない。また彼女が僕と君のことを言つたのでもないといふことを念のために附け加へておく。」

私は手紙を封じて卓子の上へ置いた。女中に尋ねると、アリヨシヤさんはまるつきり家にゐる事なんかありません。今では夜明け頃でなければ歸つて來ませんと答へた。

私はやつと家に歸つた。眩暈はするし足はぐつたりしてぶる／＼慄へてゐた。私のために戸は開けられてあつた。私の室にはイフメニエフ老人が坐つて私を待つてゐた。彼は卓子に向つて坐つたまゝ黙つて驚いたやうにエレナの方を見てゐた。エレナの方でも可なり驚いたやうに彼を黙つてじろ／＼と見詰めてゐた。なるほど彼女が老人に見えるのも無理はないと私は思つた。

「やあ、兄弟、俺はまる一時間もお前を待つてゐたが、實はお前がこんなだとは思はなかつたよ。」と、彼は

室の中を見廻して、そつと私にエレナの方に目くばせして言つた。彼の眼には驚きの色が現はれてゐた。が、尙ほ近く寄つて彼を見ると、彼が不安と悲しみを抱いてるのがわかつた。彼の顔はいつもよりも蒼ざめてゐた。「お掛けよ、お掛けよ！」と彼は心配して世話を焼くやうな風に言つた。「私はお前のところへ急いで来たのさ。用事があつてな。だが、お前はどうかした？ 悪い顔色をしてゐるぢやないか？」

「少し具合が悪いのです、朝から眩暈がしまして。」

「さうか、氣をお付け、油断しちやいけないよ。風邪でも引いたのか、どうだね？」

「いえ、たゞ神經の衰作はうちですよ。私には時々かういふことがあるのです。ですが、あなたこそお達者ですか？」

「別に變りはないよ！ これはちよつと逆上さかせたのでな。まあ用談があるよ、お掛け！」

私は椅子を寄せて彼と向き合つて、卓子の側へ腰を下ろした。

老人はやゝ私の方へ身を屈めて低聲で話しはじめた。

「いゝかね、あの娘を見ないで、私達は他のことを話してゐるやうな風をしてくれ。彼處に坐つてゐるお前のと

ころのお客は一體誰だね？」

「後であなたに皆なお話し致しますよ、お爺さん。あれや可哀さうな、ほんとの孤兒かごごで、以前この室に住んで

ゐて、珈琲店で死んだ例のスマットといふ老人の孫娘ですよ。」

「へえ、彼のところに孫娘があつたのか？ だが、お前あの娘は變挺な娘だね！ あの眼付は何といふ眼付だ

らう！ 實は私はもう五分もお前が来なければ、此處にかうして坐つてゐることは出来なかつたよ。やつと戸

は開けてくれたが、今まで口一つ利かないのだ。何だかあの娘と一緒にゐるのは大儀だ。まるで人間のやうぢ

やないものね。だが、どうしてあの娘は此處へ来たのだね？ 大方お祖父さんが死んだといふことを知らずに

やつて来たんだらうね！」

「えゝ、彼女は非常に可哀さうな娘ですよ。老人は死にながらも彼女のことを思ひ出して死んだのです。」

「うむ！ あの祖父さんにしてあの孫娘ありといふわけだね。後でそれを皆話してくれ。ひよつとしたら何か

助けることが出来るかも知れんよ。あの娘がそんなに可哀さうな娘だといふならそりや何か……だが、ちよ

つと眞面目な話があるからといつて、あの娘に少しの間出るやうに言ふことは出来ないかな。」

「でも、出ようたつて何處へも行くところがないのです。彼女は此處に住んでゐるのですから。」

私は老人に簡単に説明した。そして彼女は子供だから、彼女のゐるところで話しても差支へないといふこと

を言ひ足した。

「それもさうだな……勿論子供だね。だが、お前は俺を吃驚させたよ。お前が一緒に住んでゐるとはほんとに

驚いたよ！」

と、老人は驚きながらも一度彼女を見た。エレナは自分の事を話してると氣がついたので、黙つて頭を垂

れて、指で長椅子の縁を引張つたりしてゐた。彼女はもう新しい衣服を着てゐた。それが彼女には丁度よく似

合つてゐた。髪は新しい衣服を着たせゐでもあらゝ、平常よりも丁寧ていねいに撫でつけてあつた。全體、彼女の眼付

に鋭いところさへなかつたら、彼女はごく可愛らしい少女であつたらう。

「先づ事件の要領を簡単に明瞭に話さう。」と、老人は話しはじめた。「長い重要な件だから……」

彼は重々しく、いろ／＼思ひめぐらしてゐるやうな風に下を向いて坐つてゐた。そして自分ではさも忙しさを

うにして、「簡単に明瞭に話さう」と言ひながらも、切り出す言葉が見つからないやうであつた。何事かしら？

「あのな、ワーニヤ、俺はお前に大變なお願ひがあつて來たのだ。だがその前に……俺は今自分で或る事情を話す必要があると思ふのだ……それは極めて可笑しな事情だがな。」

彼は咳拂ひをしてちらつと私を見た。見て顔を赤らめた。顔を赤らめて、自分の落着かないのに腹を立てた。腹を立てて、そして愈々決心した。

「いや何も説明するほどのことはないよ！ 解り切つたことだ！ なんのことはない、俺は侯爵に決闘を申込む積りなのだ。それでな、お前にこのことを運んで貰つて、そして俺の介添人となつて貰ひたいのだ。」

私は椅子の背を離れて、吃驚して、呆氣に取られながら彼を見詰めた。

「お前何を見てるんだ？ まさか俺は發狂した譯でもないだらう。」

「ですが、一體どうしたのです、老爺さん！ どんな理由で、どんな目的で？ 第一、そんなことが出来るでせうか……」

「理由だと！ 目的だと！」と老人は叫んだ。「そんなことはどうでもい……」

「ようございませう。ようございませう。あなたの仰言ふことはわかりました。ですが、あなたはそんなことをしてなんのためになると思ひます？ 決闘がどんな結果を來すでせう？ 實のところ、私には少しもわかりません。」

かう私が言ふと、老人は説明した。

「俺もお前には何もわかるまいと思つたよ。お聴き！ 俺達の裁判は終つたよ。(二三日中に終るのだ。今はたゞつまらない形式だけ残つてゐるのさ)で、俺は有罪さ。俺は一萬ルーブリ近く拂はんけりやならないのだ。さう宣告されたよ。そのためには田舎の地所を取られるのさ。だから今はもうあの下劣な人間は自分のお金を

保證されたのだ。が、俺は田舎の所有地を差出して、それでもう局外の人になるのだ。そこで俺は言ふのだ。侯爵！ あなたは私を二ヶ年間侮辱しました。あなたは私の名、家の家族の名譽を踏みつけました。そして私はそれを忍ばなければならなかつたのです！ 私はその時は、まだあなたに決闘を申込む事は出来なかつたのです。若しさうすればあなたはすぐ私にかう言つたでせう。「狡猾者、貴様は早晚貴様が俺に拂ふやうに宣告されるといふことを豫期してゐるので、その金を俺に拂はないで済むやうに俺を殺さうといふのだな。いえ、先づ裁判がどう決まるか見よう。さうした上で決闘を申し込め！」と仰言つたでせう。だが侯爵閣下よ、今は裁判も決まつたのです。あなたは勝つたから何の躊躇することはないでせう。だから此處へ、決闘場へお出なつたらどうです。と、かう言つてやるのさ。どうだ、お前の考へでは。俺が最後に自分のため、すべてのために復讐するのは不當だといふのか！」

彼の眼は輝いた。私は久しいこと黙つて彼を見詰めてゐた。私は彼が胸に隠してゐる思ひを見透さうとした。「お聴き下さい、老爺さん。」と私はたうとう言葉を言ひ出さうと決心して答へた。それを言はなければ二人は到底お互の心がわからないと思つたので。「あなたは私と全く打明けてお話し下さることが出来ますか？」

「出来るとも。」と、彼はきつぱりと言つた。

「ありのまま仰言つて下さい。あなたはたゞ復讐の感情一つで決闘を挑まうとなさるのですか。それともあなたには何か他に重要な目的でもあるのですか？」

「ワーニヤ！」と彼は答へた。「お前は俺が或る點に就いては誰にも話すのを許さないといふ事を知つてゐる。だが、今だけは例外としよう。何故ならお前はその明晰な智力でどうしてもこの點を看過することは出来ないといふことを俺は見取つたからな。お前の言ふ通り俺には實際他の目的もあるよ。その目的といふのは俺の

亡びた娘を救つて、彼女を魔道から救ひ出すためさ。最近の事情は彼女をその魔道におし込めようとしてゐるのだ。」

「ですが、あなたはどうして決闘でナターシャを救ふことが出来ますか？ それの問題ですよ！」

「今彼奴の企んでゐることをすつかり打ち壊してやるんだ。いゝかね、俺が父親の優しさとか何とかいふやうな弱みに捉はれてゐると思つてはいけませんよ。そんなことは皆嘘言だ！ 俺の心の中は誰にも打明けられないよ。お前だつて知らないだらう。娘は俺を棄てて、俺の家から男と一緒に逃げたのだ。だから、俺はその晩のうちに彼女を自分の心から放り棄ててしまつたのだ——憶えてゐるか？ 若し俺が彼女の肖像を見て泣いてゐたのをお前が見たと言ふなら、それで以て俺が彼女を救すのを望んでゐるとは言へないよ。俺はあの時だつて赦さなかつたのだ。俺は失くした幸福のことや、空しい空想のことを思つて泣いたのだ。だが決して今のやうな彼女のことを思つて泣いたのぢやないよ。恐らく俺だつて度々泣くこともあらうさ。俺はそれを打明けろのを恥ぢはしないよ。なぜなら俺が以前自分の子供を世の中の何者よりも深く愛してゐたと言つても、少しも恥ぢはないからな。これは一寸見ると、俺の今の行動に矛盾してゐるやうに思はれるのさ。お前は俺にかう言ふだらう。若しあなたが、あなたの娘とも思はないものゝ運命に平氣でゐられるなら、何のためにあなたは今企んでゐるやうなことをしようとなさるのですか。が、俺はかう答へるよ。第一に下劣な、破廉恥の人間に勝たせたくないからだ。第二にはごく普通の博愛の感情からだ。彼女は俺に取つてはもう娘ではないとしても、彼女は矢張り弱い、手廻りない欺かれた人間だ。その人間を今度は全然亡ぼさうとして、もつとひどく欺いてゐるのだ。俺は直接事に當ることは出来ないが、間接に決闘でなら出来るのだ。若し俺が殺されて、血を流したら、彼女だつてもや俺達の決闘場——或ひは俺の死骸を越えて俺の下手人の息子と一緒に結婚するやうな事はな

からうさ。ほら、俺の家でお前がよく讀んだ本の中にあつたつて。自分の父の死骸を馬車で乗り越したあの女王の娘のやうにな！ それに、若し決闘するやうになれば侯爵だつて自分から結婚を望まなくなるよ。つまり俺はこの結婚をさせたくないから、それが出来ないやうにありつたけの力を盡すつもりだよ。どうだ、今度は俺の心がわかつたらう？」

「いえ、若しあなたがナターシャさんの幸福を望んでいらつしやるのなら、あなたはどうしてナターシャさんの結婚を妨げようとなさるのですか。つまり結婚はナターシャさんの名譽を恢復することが出来るぢやありませんか？ ナターシャさんの一生はまだ長いのです。ナターシャさんには名譽が必要ですよ。」

「そんな俗な考へはくだらないよ。彼女は寧ろかう思ふべきなのだ！ 彼女に取つて最も大きな恥辱はこの結婚である、つまりあの下劣な人達や、儲けた世間と關係を結ぶことであると思はなければならぬのだ！ 高尚な誇り——これが彼女の世間への答なのだ。さうしたらその時俺は屹度彼女と握手するよ。さうなつたら誰が俺の娘の名譽を辱しめるものがあらう！」

かうした自暴氣味な理想主義に私は驚かされた。が、私はすぐ、彼が無我夢中で、熱に浮かされてゐるのだといふことを察した。

「そりや餘り理想的ですね。」と、私は彼に答へた。「だから残酷ですよ。あなたはナターシャさんの生れる時に、あなたが與へなかつた力を彼女から求めていらつしやるのです。それにナターシャさんだつて、よもや侯爵夫人となりたいから結婚を承知したのではないでせう。ナターシャさんは愛してゐるのぢやありませんか。これは自然の情ですからね。これは運命ですからね。それからあなたは俗見に對する侮蔑をナターシャさんから求めていらつしやるやうだが、御自分ではその俗見の前に跪拜してゐるぢやありませんか。侯爵はあなたを

辱しめたのです。そしてあなたが卑劣な詐欺手段で侯爵家と親戚関係にならうと云ふ心があるといふ事を公然疑つたのです。そこで、あなたのお考へでは、娘自身が彼等の方から正式に申込んで来た今日、彼等に拒絶すればそれが前の誹謗の最も完全な反駁だと仰言るのでせう。それであなたの得るところはなんですか？ あなたは結局侯爵自身の意見の前に跪拜してゐるのです。あなたは自分で過失を認めるやうに求めてゐるのです。あなたは彼を嘲り、彼に復讐しようとしてゐるのです。あなたはそのため娘の幸福を犠牲にしてゐるのです。これが利己主義でない云へますか？」

老人は陰鬱な顔つ面をして坐つてゐたが、暫くは一言も云ひ出さなかつた。

「お前は俺を正當に理解してゐないよ、ワーニャー」と、彼はやがて言ひ出した。涙が彼の眼毛に輝いてゐた。「誓つて言ふが、お前は正しく解してゐないよ。だが、このことはもう止めよう！ 俺はお前の前に到底自分の感情を打ちまくことが出来ないよ。」と、彼は立上つて帽子を取りながら言ひつゞけた。「たゞ、一言云つとくが、お前はいま娘の幸福のことを言つたね。俺は絶対にその幸福を信じてゐないよ。たゞ一つ信じてゐるのは、この結婚はたとへ邪魔がなくとも決して成り立たないといふことだ。」

「どうしてそんなことが！ なぜあなたはそんなことをお思ひです？ あなたはそれでは何か御存じですか？」と私は好奇心に驅られて叫んだ。

「いや、別に何も知つてはゐないよ。だが、あの憎い老婆がこのことに決心が出来ないのだ。が、そんなことは要するに謔言だ、つまらんことだ！ 俺はかう信じてゐるよ。どういふ風になるか俺の言葉を憶えてゐるが、もしこの結婚が成立するとすれば、それはこの結婚によつて利益を得ようとする下劣な人に、他人の分らない秘密な目論見がある場合に限るのだ。俺はどうしてもその目論見がわからない。お前は自分の心に聞

うで自分で決めるが、一體彼女はこの結婚によつて幸福になるかどうか。相手は子供で、今は彼女の愛に溺れてゐるが、結婚するが最後、彼女を蔑んだり、辱しめたり、苛めたりするにきまつてゐるのだ。そこで嫉妬とか、苦痛とか、離縁とか云ふやうな破目になつて、しまひには犯罪沙汰にならないとも限らない……いや、ワーニャー！ お前がもしこの問題を取り持つてゐるとすれば、豫め言つて置くが、それはもう遅いよ。他に言ふこともないから、これで御免蒙る。さやうなら。」

私は彼を止めた。

「まあ、お爺さんから決めませう。少し待つて下さい。たゞ眼ばかりがこのことを見てゐるのではありません。大方これはうまい具合に解決がつくでせう。例へば、只今の決闘のやうな無理な、作爲的な解決をしなくとも自然と決まるでせう。時は最も好い解決者です。私は最後にあなたの御計畫が全然不可能であると云ふことを申したいのです。あなたは侯爵があなたの決闘申込に應ずるといふことを、たとへ一寸でもお考へなさることが出来ますか。」

「どうして應じないことがあらう。お前は何を言つてゐるんだ。」

「誓つて申しますが、決して應じません。屹度十分な口實を設けるに違ひありません。しかもそれをくだらない勿體をつけてやるのです。そしてあなたは全く世の中の笑ひ草になつてしまひます……」

「兄弟！ 俺を憐んでくれ。お前は俺を苛めてゐるやうなものだ。どうして彼は決闘の申込に應じないだらう。いやワーニャー！ お前はつまるところ一種の詩人に過ぎない。本當の詩人だ。どうだ、お前の考へでは俺と一緒にやつて喧嘩するのはみつともないと思ふかね。俺は彼奴より悪い人間ぢやないよ。俺は老人だ。侮辱された父だ。お前は露西亞の文學者だ。だから介添人としては適當な人物だよ……それから……俺はお前にもつ

と何か言ふべきことがあつたが、もう分らなくなつてしまつた……」

「それごらんない。侯爵は屹度あなたと決闘するのは全然不可能だと言ふことを先づあなた御自身に悟らせるやうな口實を設けて來ますよ。」

「うむ……よし、お前の思つた通りになるとしておく！ 俺は勿論ある時期まで待つてゐる。そして時がどうするかを見よう。だがな——お前は彼方へも、アンナ・アンドレーウナへも二人の話を打明けないと約束してくれるかね？」

「約束します。」

「その次にね、ワーニヤ！ 今後決してこのことを俺と話さないやうにしてくれ。」

「承知しました、約束します。」

「それから、もう一つお願ひがあるよ。お前には俺達のところが大方退屈だらうとは承知してゐるが、しかし出來ることなら俺達のところへ度々來て貰ひたいのだ。俺の不幸なアンナ・アンドレーウナは非常にお前を可愛がつてゐるよ。そして……そして……さうだ。お前がゐないと退屈がるのだ……いいかね、ワーニヤ！」

と、彼は私の手を強く握つた。私は心の底から彼に約束をした。

「それから今度はね、ワーニヤ！ 變なことを聞くやうだが、お前にはお金があるか？」

「お金ですつて！」と私は吃驚して繰り返した。

「さうだよ（と老人は顔を赤くして目を伏せた。）俺はお前の住居……お前の境遇……そんなのを見ると、何か他に臨時の費用が要りさうに思へる。（つまり今の場合さうらしい。）で、こゝに……取敢へず百五十ルーブリある、第一回分として……」

「百五十ルーブリですつて、それも第一回分ですつて。あなたは訴訟に負けたんぢやありませんか？」

「ワーニヤ！ お前は俺の見たところでは、俺の心が少しも分つてゐないやうだ。特別の費用が要ることがあるだらう。これを取つておけ。或る場合にはお金が境遇の獨立や決心の自由を助けることがある。或はお前には今不用なかも知れないが、これから先き要らないとも限らないよ。兎に角俺はこれをお前のところへ置いておくよ。これは俺が集めたすべてだ。使はなければ返せばいいぢやないか。では、これで歸るとしよう。ああ……お前は何といふ蒼い顔をしてゐるのだ！ お前はまるで病人のやうだな……」

私は逆らはないでお金を取つた。彼が私のところへ何のためにお金をおいて行つたかは明らかなことであつた。

「私はやつとからして立つてゐるくらゐです！」と、私は答へた。

「そりや油断しちゃいかんよ、ワーニヤ。氣をつけなくちやいけないよ！ 今日は何處へも出掛けないがいよ。アンナにもお前の様子を言つてやるよ。お醫者は要らないか？ 明日俺はまたお前のところへ來るよ。若し歩けさへすりやどうかして來るよ。さあ、もう寝たらいいだらう……ぢや、さやうなら。さやうなら娘さん。おや彼方（あつち）を向いてしまつたな！ あの、ワーニヤ！ そらもう五ルーブリやる。これはあの娘にやつてくれ。だが、あの娘には俺がやつたと言はないでくれ。そしてたゞあの娘のために使つてくれ。ほら靴とか、下着とか……なんでも必要なものにね！ ぢや、お前さうなら……」

私は彼を門口まで送り出した。私は門番に食物を持つて來るやうに頼まねばならなかつた。エレナはその時まで何にも食へなかつたのだ。

室へ歸つて来ると私は眩暈がして室の真中に打倒れた。エレナの叫び聲だけは憶えてゐた。彼女は両手を拍つて、私を支へようと飛んで来た。私の記憶に残つてゐるのはそれだけであつた……

後で私はもう寢床の上に横はつてゐるのに気がついた。エレナは後で話したが、彼女はその時私達の食事を運んで来た門番と一緒に私を長椅子の上へ運んだのだ。私は幾度か眼を醒ました。その都度私の上に腰を屈めてゐるエレナの同情深い心配さうな顔を見た。が、こんなことも皆ぼんやり夢のやうに憶えてゐる。可哀さうな少女の優しい姿が私の前に夢現のうちに絶えず私の前に幻影か繪のやうにちらついていた。彼女は私に茶を運んだり、補圍を直してくれたり、または私の前に悲しさうに驚いたやうに坐つて、自分の指で私の髪の毛を撫でつけたりした。一度彼女が私の顔にそつと接吻したのを憶えてゐる。またある時は夜中にふと眼を醒まして、私の前の長椅子にくつついてゐる小卓子の上の蠟燭の光を透して、私はエレナが私の枕に顔を埋めて、蒼ざめた唇を半ば開けて、掌を自分の温かい頬に當てた。ほの／＼と明るくなつてくる曙の薔薇色の光は、正氣に返つたのは朝早くであつた。蠟燭は燃え盡きてゐた。ほの／＼と明るくなつてくる曙の薔薇色の光は、もう壁に映つてゐた。エレナは卓子の前の椅子に腰を掛けてゐた。そして自分の疲れた頭を卓子に突いた。左手の上に凭らせたまゝぐつすり眠つてゐた。私は彼女のふつくりした無邪氣な顔に見惚れてゐたのを憶えてゐる。彼女の顔は、その眠つてゐるところを見ると、何となく子供らしくない、哀愁の色を浮べて、いかにも變に病的な美しさが溢れてゐた。蒼ざめて、肉の落ちた頬の上には長い睫毛が生えて、蒼い顔に垂れかゝつた木蘭の

やうな眞黒な髪の毛は蓬々として重さうに一方に縮れて垂れ下つてゐた。片方の手は私の枕の上に載つてあつた。私はその瘦せた手をそつと接吻した。不幸な少女は眼を醒まさなかつたが、たゞ思ひなしか彼女の蒼ざめた唇にちらつと微笑が浮んだやうであつた。私は彼女につく／＼見惚れてゐたが、そのうちにすや／＼と心地よい眠りに落ちた。今度は私は正午近くまで眠り通した。眼が醒めて見ると、私は殆んど病氣が癒つたやうな感じがした。たゞ身體がぐつたりと疲れて重かつたので、今まで病氣であつたことがわかつた。かうした神經的な劇しい發作は私には以前にもあつたので、私はそれをよく知つてゐた。病氣はいつも一晝夜ぐらゐで過ぎ去つた。が、その一晝夜がなか／＼劇烈で險惡であつた。

もうかれこれお正午であつた。第一に私の眼に入つたのは、室の隅に紐で吊つてある昨日私の買った帷帳であつた。エレナは其處を片づけて、自分のため特別な小さな間を造つてあつた。彼女は燦燦の前に坐つて、茶を沸してゐた。私が眼を醒ましたのを見て、彼女は快くにこ／＼と笑つてすぐ私の傍へ来た。

「お前は俺の親友だ！」と、私は言つて彼女の手を取つた。「お前な一晩中私を看病してくれたね。私はお前がそんなに心の優しい娘だとは知らなかつたよ。」

「でも、あなたは私が看病したのをどうして知つて？ ひよつとして私は一晩中眠りはしなくて？」と彼女は人の善い、はにかんでるやうな狡い表情を顔に浮べて、同時に自分の言葉に顔を赤らめながら、私を見て尋ねた。

「私は時々眼が醒めたので、すつかり見たよ。お前は夜明け前に眠り始めたのだ……」

「お茶をあげますか？」と彼女はさもこの會話を續けるのが厭なやうに話を切つた。かういふことは純潔な、ごく正直な心の人だけが他人に褒められる時によくする事である。

「飲みたいよ。」と、私は答へた。「だが、お前は昨日晝飯を食べたかね？」

「晝飯は食べなかつたけど、夕飯は食べてよ。門番が持つて来てくれたの。だけど、あなた話をしてはいけな
いでせう。静かにお休みなさいな。あなたはまだほんどでないですもの。」と、彼女は私に茶を持つて来て、私
の寢床に腰を下しながら言つた。

「寝てゐると言ふのか！ では、夕方まで寝てゐよう。だが、夕方ちよつと出てくるよ。乾度行かなきゃなら
ない用があるのだよ、エレナ！」

「まあ、行かなきゃならないなんて！ 誰のところへ行くの？ 昨日のお客さんのところぢやなくつて？」

「いえ、あの人のところぢやないよ。」

「まあ、あの人のところでなくつてよかつたわ。あの人が昨日あなたを病氣にしたのよ。では、あの人のお嬢
さんのところへ？」

「だが、お前どうしてあの人の娘のことを知つてゐるのだ？」

「私、昨日皆な聴いてよ。」と、彼女は下を向いて答へた。

彼女は顔を曇めて眉を眼の上へきつと寄せた。

「あのお爺さんはいけない人だわ。」と、やがて彼女は附け加へた。

「お前あの人を知つてゐるのか？ そんな人ぢやないよ。あの人はごく善い人だよ。」

「いえ、いえ、あの人は悪い人よ。私聴いてたわ。」と彼女はむきになつてかう言つた。

「ぢや、お前は何を聴いたといふのだ？」

「だつて、あの人は自分の娘を救すのを厭がつてゐるんですもの……」

「だが、あの人は娘を愛してゐるのだよ。娘の方があの人に對して悪いのさ。あの人は娘のために心配して、
心を悩ましてゐるのだよ。」

「では、どうして救さないの？ 今救したつて娘さんはあの人のところへは行かないでせう。」

「どうしてさうだ？ なぜ？」

「なぜつて、あんな人は娘さんに可愛がられるやうな人ぢやないんだもの。」と、彼女は熱して答へた。「その
娘さんはあの人のところを逃げて、物貰ひになつた方がましだわ。そしてあの人は自分の娘が物貰ひをしてゐ
るのを見て、苦しむがいゝわ。」

彼女の眼は輝いて頬は熱つて來た。彼女はたゞ口から出まかせに言ふのではないと私は思った。

「あなたはあの人の家へ私をやらうとしたの？」と彼女は一寸黙つた後で言つた。

「さうだよ、エレナ」

「いやよ、私それよりか下女に雇はれた方が餘つぽいゝわ。」

「ほんとお前は悪いことばかり言ふな、エレナ！ 何といふ馬鹿なことをいふのだ。ぢや、誰のところへ雇
はれるのだ？」

「どんな百姓の處だつていゝわ。」と彼女は次第につん／＼ながら答へた。彼女はひどく燃え立ちやすい娘で
あつた。

「百姓だつてお前のやうな働き手は要らないよ。」と私は笑ひながら言つた。

「では且那方のところへ。」

「お前のやうな性質で且那方のところへ住めると思ふか？」

「私のやうな者だつて。」と彼女は激すれば激するほど荒々しく答へた。

「だが、お前は耐へきれないよ。」

「耐へられますとも、私を叱つても、私わざと黙つてゐるわ。私を打つても矢張り黙つてゐるわ。何といつても黙り通してよ。打つたつてどうしたつて泣きはしないわ。私が泣かなければ、あの人達はもつと／＼意地悪くなつてよ。」

「何を云ふのさ、エレナ！ お前は随分いぢけてゐるね。そしてお前は何といふ高慢な女だらう！ お前はいろんな悲しい思ひをしたと見えるね……」

私は起ち上つて自分の大きな卓子のところへ近寄つた。エレナは長椅子に坐つたまゝ、物思はしげに下を見詰めて紙の縁をいぢつてゐた。彼女は黙つてゐた。私の言葉に腹でも立てたのかしら？ と私は思つた。

卓子の傍に立つて、私は無意識に、昨日私が編纂のために持つて来た本を觸れた。そしていつの間にかそれを讀むのに氣を取られてしまつた。私には度々そんなことがあつた。一寸行つて本を開けるともうそのまゝ氣が變つて、何もかも忘れて讀み耽るのであつた。

「あなたは其處でしよつちう何を書いているの？」とエレナは靜かに私の卓子に近づいて、おづ／＼した笑を浮かべながら言つた。

「いろんなことさ、エレナ！ これで私はお金を取つてゐるのだよ。」

「願書なの？」

「いや、願書ぢやないよ。」そこで私は私がいろんな物語や、いろんな人々のことを書いて、それで物語とか小説とかいふ本が出来るのだといふことを出来るだけ彼女に説明した。彼女は非常な好奇心を抱いて聽いてゐた。

「では、何ですか、あなたは此處でいつもほんとにあつたことを書いてるの？」

「いや考へ出すのだよ。」

「なぜあなたはほんとでないことを書くの？」

「まあ、それ讀んでごらん。ね、この本を讀んでごらん。お前はそれを一度讀んだつてね。お前讀めるだらう？」

「讀めてよ。」

「ぢや、それをごらんよ。この本は私が書いたのだ。」

「あなたが？ 私讀むわ……」

彼女は何か私に頻りに言ひたさうであつたが、さも困つたといったふう非常にまごついてゐた。彼女の間ひは何か意味ありげであつた。

「あなたはこれでどのくらゐお金を貰つて？」と彼女はやがて訊いた。

「そりや決つてゐないよ。時には澤山くれるし、時には仕事をしないので何もくれないよ。むづかしい仕事さ、エレナ。」

「では、あなたお金持ちぢやないの？」

「いや、金持ちぢやないよ。」

「そんなら私働いてあなたを助けるわ……」

彼女はちらつと私を見て、眞赤になつて眼を伏せた。そして私の方へ二歩ばかり近寄つて、急に私に両手で抱きついた。そして顔を堅く／＼私の胸へ押しつけた。私は吃驚して彼女を見詰めた。

「私あなたを愛してよ、……私高慢な女ぢやないわ。」と、彼女は言った。「あなたは昨日私のことを高慢な女だと仰言つたわね。さうぢやないわ、さうぢや……私そんな女ぢやないわ……私あなたを愛してよ。私を愛してくれるのはあなた一人つきりですもの……」

が、彼女の胸にはもう涙が込み上げてゐた。そして、すぐにその涙は昨日の發作はつさくの時のやうに彼女の胸から迸はなした。彼女は私の前に跪ひざまいて私の手や足を接吻した……

「あなたは私を愛してくれるわね……」と彼女は繰り返した。「たゞあなた一人だけ、一人だけよ……」

彼女は發作的に私の膝を両手で抱き緊めた。それまで堪へてゐた彼女のすべての感情は、制し難い猛烈な力で、一時に外へ激發した。そして、私にはこの時まで堅く秘してゐた心の不思議な強情がよくわかつた。それは自分をさらけ出して、すっかり打ち明けようとする欲求が、強ければ強いだけ、益々頑固で、荒々しかつた。それは全身を愛と感謝と愛撫と涙とに献さげてしまふ時に起る避け難い情熱である……

彼女はヒステリイになつたやうに泣きじやくつた。私はやつとのことで、私を抱き緊めてゐる彼女の手をといた。私は彼女を抱き上げて長椅子の上へ運んだ。彼女はまだ長いこと、さも私を見るのが羞かしいかのやうに枕に顔を隠して泣いてゐたが、自分の小さな手で私の手をつかき握つて、それを自分の胸から放さなかつた。

彼女はだん／＼落着いた。がまだ依然として私の方へは顔を上げなかつた。そのうち二度ばかり彼女はちらつと私の顔を眺めたが、その眼のうちには非常な優しさと、一種のおづ／＼した、またも秘めてしまつた感情とが現はれてゐた。そして、終ひには顔を赤らめてにつこり微笑んだ。

「よくなつたのか？」と、私は尋ねた。「エレナ！ お前は感情家だね、お前はほんとに痛々しい娘だね！」

「私エレナぢやないわ……」と彼女はまだ私に顔を隠しながら囁いた。

「エレナぢやない？ ぢや、何といふのだね？」

「ネルリつていふの。」

「ネルリ？ どうしてネルリと言はなければならんのだ？ そりやほんとにいふ名だね。お前がさう呼ばれたといふなら、私はお前をさう呼ぶよ。」

「お母さんは私をさう呼んだの……お母さんより他の人は誰もさう呼ばないの……私自分でもお母さんより他の人にさう呼ばれるのがいやなんですもの……ただどあなたはさう呼んで頂戴！ 私さうしていたときたいわ……私あなたをいつまでも愛してよ、いつまでも……」

愛に充ち満ちた、高慢な心だと私は思つた。が、彼女が私に取つて……ネルリとなるまでには、私はどんなに長く辛抱しなければならなかつたらう。だが、今は私は彼女の心が永久に私のものとなつたといふことを知つたのだ。

「ネルリ、お聴きよ！」と、私は彼女の落着くのを待つて訊いた。「お前は、お前を愛したものは、お母さん一人で、他に誰もないと言つたね。だが、お前のお祖父さんはほんとにお前を愛さなかつたのかね？」

「愛さなかつたわ……」

「だが、お前は此處の階子段かきだのところ、お祖父さんのことを思つて泣いたぢやないか？」

彼女は一寸の間思ひに沈んだ。

「いゝえ愛さなかつたのよ……あの人は悪い人ですもの。」と、彼女の顔には病的な感情が込み上げて來た。

「だが、お祖父さんから何も求めようがないぢやないか、ネルリ。あの人は全く氣が狂つてゐるらしかつた。」

あの人は狂人のやうな死に方をしたぢやないか。私はお前にあの人がどんな死に方をしたか話したらう。」

「え、ただお祖父さんは死ぬ間際になつてから急にあゝ凄惨したのよ。此處に一日中かうして坐つたきりであることが度々あつてよ。若し私が来なければあの人は次の日もその次の日も、食べも飲みもしないでゐたでせうよ。でもその前にはお祖父さんはもつとずつとよかつたわ。」

「前つていつ頃？」

「まだお母さんが亡くならなかつた頃よ。」

「では、お前があの前に食物や飲物を持つて来たのか、ネルリ？」

「え、私を持つて来たの。」

「お前どこから持つて来たの、ブブーノワから？」

「いゝえ、私一度だつてブブーノワなんかから何も買ひはしないわ。」と、彼女はなんとなく顔へ慥でむきになつて言つた。

「では、何處から持つて来たのだ。お前のところには何もなかつたらう？」

ネルリは黙つて恐ろしく眞蒼になつた。やがて長く／＼ちつと私を見つめた。

「私街道へ物買ひに行つたの……五コークほど買つて、あの人にパンと嗅ぎ煙草を買つてやつたの……」

「して、あの人がそんなことを許したのか！ ネルリ！」

「私はじめは自分で行つたの、あの人には言はないで。だけど、あの人がそれを知つてからは、自分で私を物買ひに遣つたの。私が橋の上に立つて、道を通る人から買つてゐると、あの人は橋の邊りを歩いて待つてゐたの。そして私にくれたと見ると、すぐに私のところへ飛んで来るのよ。まるで私があの人から隠してもするや

うに、あの人のために買ひ集めるのでないかのやうに、私からお金を取上げてしまふのよ。」

かう言つて彼女は變な鋭い苦笑を浮べた。

「そんなことは皆なお母さんが亡くなつてからのことよ。」と彼女は付け加へた。「それからはあの人はもうすつかり狂人のやうになつてしまつたの。」

「では、お祖父さんはお前のお母さんを非常に愛してゐたのだね？ どうしてあの人はお母さんと一緒に暮さなかつたの？」

「いゝえ、愛さなかつたのよ……あの人は悪い人でした。お母さんを赦さなかつたんですもの……昨日のあの意地悪いお爺さんのやうに。」と彼女は殆んど嘸くやうな小聲で言つて益々顔を蒼くした。

私は震へ上つた。一つの小説の筋がちらつと私の想像のうちに輝いた。棺桶屋の地下室で亡び行く不幸な女。自分の實の娘であるこの女を呪つた祖父を時々訪ねてゆく彼女の孤兒。珈琲店で自分の犬の死んだ後から死んで行く老耄れた奇人の老翁！……

「あのね、アゾールカは以前にはお母さんでしたわ。」とネルリは不意に何か思ひ出したやうに微笑みながら言つた。「お祖父さんは前にはお母さんを愛してゐたのよ。そしてね、お母さんがお祖父さんのところを出たときに、お母さんのアゾールカはお祖父さんとこに残つたの。だからお祖父さんはアゾールカをあんなに可愛がつたのよ……ただどお母さんを赦してくれなかつたの。そしてアゾールカが死ぬと、自分も矢張り死んでしまつたの。」と、ネルリは素直なく言ひ足した。が、彼女の顔からはいつの間にか微笑が消えてゐた。

「ネルリ、お祖父さんは元はどんな人だつたの？」と私はしばらく經つと尋ねた。

「あの人は元はお金持でしたつて……私お祖父さんがどんな人だつたか知らないわ。」と彼女は答へた。「あの

人のところには何かの工場があつたつて……お母さんはさう言つてよ。お母さんははじめは私が子供だと思つて餘り話してくれなかつたの。しよつちり私を接吻しては、私に今にすつかりわかるよ、時が来れば分るよ、可哀さうな子だねえ！ つてさう言ふのよ。そしていつも私を可哀さうな不仕合せな子だつて言ふのよ。そして夜なんかね、よく私が眠つてゐると思つてね、(だけど私眠りはしなかつたの、わざと眠つた振りをしてゐたの。)お母さんはいつも私のことを泣いて、そして私にキッスをして言ふのよ、可哀さうな不仕合せな子だつて。

「どうしてお前のお母さんは死んだの？」

「肺病でよ、もう六週間になるの。」

「で、お前はお祖父さんがお金持だつた頃を憶えてゐるかね？」

「だつて、私その頃はまだ生れなかつたんですもの。お母さんは私の生れない前にお祖父さんのところを出たんですもの。」

「誰と一緒に出たの？」

「知らないわ。」と、ネルリは靜かに、思ひに沈んでゐるかのやうに答へた。「お母さんは外國へ行つたの。そして其處で私を生んだの。」

「外國？ 何處だ？」

「瑞西よ。私は方々へ行つたわ。伊太利へも、巴里へも行つてよ。」

私は吃驚した。

「して、お前は憶えてゐるのか、ネルリ？」

「淨山憶えてゐるわ。」

「どうしてお前はそんなによく、露西亞語を知つてるのだ、ネルリ？」

「お母さんがまだ彼地あつちにゐる頃私に教へて下さつたの。お母さんは露西亞人でしたわ。なぜつてお祖母さんが露西亞人でしたもの。お祖父さんは英國人でしたけど、矢張り露西亞人のやうでしたもの。そして、一年半前に私達が此地へ歸つて來てから、私はすつかり露西亞語を憶えてしまつたの。お母さんはもうその頃から病氣でした。それから私達はだん／＼貧乏になつて來たの。そしてお母さんはしよつちり泣いてばかりゐたわ。お母さんは初め此處のペテルブルグで、長いこと、お祖父さんを探し廻つたのよ。そしていつもお祖父さんの前に濟まないと言つて、始終泣いてゐたの……ほんとに泣いて泣き通してしたわ！ してお祖父さんが貧乏になつたといふことがわかると、また一層泣きだしたのよ。お母さんはお祖父さんに度々手紙を書いたのだけど、お祖父さんはいつも返事をよこさなかつたのよ。」

「どうしてお母さんは此地へ歸つて來たのだ？ たゞお祖父さんのところへ來ただけかね？」

「知らないわ。彼地あつちでは私達はほんとによかつたわ。ネルリの眼は輝いた。「お母さんは私と二人つきりで暮してゐましたの。お母さんにはあなたのやうな善いお友達が一人ありましたわ……その人はまだ此地にゐる頃からお母さんを知つてゐたのよ。だけど、その人は彼地で死んでしまつたの。そしてお母さんは歸つて來たのよ……」

「それやお前のお母さんはその人と一緒にお祖父さんのところを出たのかね？」

「い、え、その人とちやなくてよ。お母さんは他の人とお祖父さんのところを出たの。だけど、その人はお母さんを棄ててしまつたのよ……」

「それは誰だね、ネルリ？」

彼女は私を見たまゝ何とも答へなかつた。彼女は自分の母が誰と逃げたのか、そして大抵誰が自分の父なのかは明らかに知つてゐるらしかつた。彼女はその人の名を私に言ふさへ苦しかつたのだ……

私は無理に彼女を問ひ詰めて苦しめたくなかつた。彼女は妙ないら／＼した、燃え立ちやすい、併しその激情を強ひて抑へようとする性質の少女であつた。同情に富んではゐるが、しかし驕慢と自尊心のうちに閉ぢ籠つてゐる娘であつた。私が彼女を知つてからといふものは、彼女はいつも全心をあげて最も輝かしい晴々とした愛情で私を愛してゐた。彼女が時々苦しうに思ひ出す自分の死んだ母と同等に私を愛してゐた——それにもかゝらず、彼女は私と外へ出ることには稀であつた。この日の外は自分の過去のことを私と物語るやうなこともごく稀であつた。いや却つて反對に私から素直なく逃げ隠れた。しかしこの日は数時間の間、苦痛と發作的な慟哭の中に、きれ／＼に物語を續けながら、彼女は私に彼女の追憶のうちで最も彼女の心を悩ませ苦しめてゐる事柄をすつかり話して聞かせた。私はこの恐ろしい物語をいつまでも忘れることは出来ないだらう。が、彼女の主な歴史はまだこれから先である……

それは恐ろしい物語であつた。それは自分の幸福をなくした、棄てられた女の物語であつた。病み抜いて、苦しみ抜いて、すべての人に見放され、終ひには彼女が最後の望みを置いてゐた一人の人にすら——いつか彼女のために辱しめられてたうとう堪へ難い苦痛と屈辱のために發狂した自分の父にすら拒まれた女の悲惨な物語であつた。それは、落魄と絶望の極度に陥つた女の哀れた物語であつた。まだ赤子のやうな自分の娘を通して、冷たい汚らしいペテルブルグの街々を歩きながら他人の施與を乞うて、最後の幾月かを濕々とした地下室の中で死んだやうに過した儂い女の一生であつた。彼女の父は臨終の際まで彼女を赦さなかつた。たゞ

その最期の刹那に氣がついて、彼女を赦さうとして駈けつけたが、悲しいことには彼が世の何ものよりも深く愛してゐた彼女は最早一個の冷たい骸骨と化し去つてゐた。かうした哀れた女の歴史であつた。それは發狂した老人と彼を解してゐた幼い孫娘との間に結ばれた神祕的な、到底解しやうのない關係に就いての不思議な物語であつた。その少女はまだ幼いにもかゝらず、他の人々がその氣樂な、順調な生活に於いて一生かゝつても経験することの出来ない多くのことを最早解してゐた。それはそれは暗い陰氣な物語であつた。ペテルブルグの重苦しい空の下で、屢々人知れず秘密に行はるゝ暗い悲痛な物語の一つであつた。大都會の蕪暗い、隠れた裏通りで、馬鹿々々しい生活の沸騰や、くだらない利己主義や、利害の衝突や、苦々しい淫蕩や、秘密な犯罪や、すべてこれ等の無意義な病的な生活の焦熱地獄の中で行はるゝ不思議な陰慘な物語の一つであつた。が、この物語はこれから先きずつとつゞくのである。

14831

昭和二十三年八月五日印刷
昭和二十三年八月十日發行



日本社

發行所

虚げられし人々上巻(日本文庫31)
定價 百圓

著者 昇 曙 夢

發行所 東京千代田区内幸町二丁目三番地 尾正男

印刷所 長野市岡田町一七六番地 大日本法令印刷會社

代表者 田中重彌

東京千代田区内幸町一丁目三番地 幸七
會員登錄番號A二四〇二三番

株式會社

日本社

電話銀座(57) 二二六
六〇二六
六六四一
東京 六七八四
一八五四
番番番番

○書籍は品切れ品多数有りますから返送料添付御開合せの上にて御注文願ひます。



日本文庫 刊行の辭

あたらしき日本はふかき知性と永遠の藝術性の探求の上に建設される。眞に平和を愛好し、たかめられた文化教養を身につけるためには、我々は、意欲的な攝取によつて生々發展をはからねばならない。かくて廢墟革命復興のケイオスの中にあつて、聳立し、永遠不滅の生命を有する名著をえらび、「日本文庫」は刊行された。レバトリーはひろく文學藝術思想哲學經濟自然科學の全般にわたり、クラシックと現代、洋の東西を問はず、イデオロギーに泥まず、眞に不滅の價値ある良書を上梓せんとするものである。

幸ひに新しき日本文化再建のために有識なる讀書人の協力を期待するものである。

- | | |
|------------------|---------------------|
| 1 夏目漱石著 坊 ちやん | 7 ヒルテイ著 我ら何を爲すべきか |
| 2 夏目漱石著 草 枕 | 8 菊池 寛著 忠直卿行狀記 |
| 3 チエーホフ著 可 愛 い 女 | 9 有 島 武 郎著 生れ出づる機み |
| 4 武者小路實篤譯 その妹・愛愁 | 10 菊池 寛著 無名作家の日記 |
| 5 森 鷗 外著 雁 | 11 トルストイ著 復 活 (上下巻) |
| 6 ジイド著 ドストエフスキー論 | 12 昇 曙著 田 園 の 憂 鬱 |
| | 13 佐藤春夫著 田 園 の 憂 鬱 |

品切れの書籍がありますので御注文前に在庫有無御問合せの上にて御申込下さい。

年 月 日 109

閏 三	閏 七	閏 十	閏 十	閏 十	閏 十
閏 六	閏 六	閏 六	閏 六	閏 六	閏 六
閏 六	閏 六	閏 六	閏 六	閏 六	閏 六
閏 八					閏 九

明倫彙編
家範典

昭和廿四年 十月 壹 八日

終

